

2019年

地域連携年報

第七号

滋賀短期大学
地域連携教育
研究センター

SHIGA JUNIOR COLLEGE
COLLABORATIVE
RESEARCH & COMMUNITY
COOPERATION CENTER



目次

1.	地域連携教育研究センターの体制	1
2.	調査研究プロジェクト	
(1)	保育者養成校における主体的・対話的な学びにつながる指導案作成の指導過程の検討 プロジェクト	三上 佳子…3
(2)	資格試験対策を利用した調理技術向上の取り組み	原 知子…4
(3)	介護旅行サービス人材の育成について	江見 和明…5
(4)	幼児向けマナー教材と実施プログラムの開発 ～地域交流を目指して～	若生真理子…6
(5)	学生主体の地域連携活動による子育て支援の試み (2) ～乳幼児のための音のできるおもちゃ（楽器）制作プロジェクトを通して～	松井 典子…8
(6)	幼児教育における数学的思考力を育てる教材開発プロジェクト	久米 央也…9
(7)	幼児の粘土遊びにおける 教材プログラム/教材・素材 研究	深尾 秀一…10
(8)	Les Rencontres Calenzana ～カレンツァーナ国際音楽祭参加報告～	柚木たまみ…11
3.	地域との連携による教育研究活動	
(1)	ふるさと竜王夏祭り	服部 聖羅…12
(2)	zezeときめき坂ハロウィン	服部 聖羅…13
(3)	ヘキセンハウスの制作	服部 聖羅…14
(4)	近鉄リテーリング（大津サービスエリア下り）と生活学科食健康コース2回生の メニュー開発プロジェクト ～滋賀県の食材を使った丼ぶりとデザートのメニュー考案～	山岡ひとみ…15
(5)	びわ湖こどもの国チャレンジ合宿 ～食事サポート隊の活動～	岡田 香織・豊岡 真莉・岸田みさき・中平真由巳…16
4.	地域に向けた公開講座	
(1)	公開講座	
1)	クラシック音楽の愉しみ ～木管五重奏の響～	元日本センチュリー交響楽団ファゴット奏者 宮本 謙二…17
(2)	生涯学習講座	
1)	銅版画教室 ～おもしろくてたまらない銅版画の魅力を～	名誉教授 前川 秀治…18

- 2) 楽しくつくるお菓子
～ナツツを使ったお菓子・紅茶を使ったお菓子～……………石井 明…19
- 3) 滋賀の食材を使ってアイデア料理
～手軽・おいしい・健康的な食事～……………山岡ひとみ…20
- 4) スウェーデンハンドセラピー
～背中に触れるヒーリング～……………非常勤講師 朝野 典子…21
- (3) こども講座
- 1) こども陶芸教室
～カップと小皿に絵付、オリジナル食器を作ろう～・湖陶焼 長養窯 深田 猛…22
- 2) こどもフラワーアレンジ教室
～サマーフラワーアレンジ～……………グラフィエュード flower designer 鶴嶋奈美代…23
- 3) こども書道教室（小学校1・2年生）
～硬筆の練習～……………読売書法会理事 中村 哲堂…24
- 4) こども書道教室（小学校3～6年生）
～夏休みの課題を書こう～……………読売書法会理事 中村 哲堂…25
- 5) こどもラボラトリー
～食べ物の不思議～
……………清水まゆみ・灰藤友理子・岡田 香織・岸田みさき・豊岡 真莉…26
- 6) こどもドライポイント教室 ………………名誉教授 前川 秀治…27

5. 大学及び自治体との連携事業

- (1) 滋賀医科大学との共催公開講座
- 1) 筋肉と健康……………堀池喜八郎…28
- 2) サルコペニア対策を運動から考える
……………滋賀医科大学医学部附属病院 リハビリテーション部 主任理学療法士 岩井 宏治…29
- (2) 滋賀大学教員免許状更新講習
- 豊かな感性を育む—音楽と絵本—
- 1) 絵本の教材研究と読み聞かせの方法について……………浜崎 由紀…30
- 2) 子どもの豊かな感性と表現を育む音楽表現について……………松井 典子…31
- (3) 滋賀県保育協議会との連携講座
- 1) 令和元年度滋賀県家庭的保育推進事業の基礎研修……………前川 賴子…32
- (4) 地域移動講座
- 1) 地域移動講座 in 守山……………名誉教授 前川 秀治…33
- 2) 地域移動講座 in 大津……………地域連携教育研究センター…34
- 3) 地域移動講座 in 長浜……………久米 央也…35
- 4) 地域移動講座 in 甲賀……………永久 欣也…36

5) 地域移動講座 in 東近江	深尾 秀一	37
6) 地域移動講座 in 高島	荻田 純久	38
7) 地域移動講座 in 大津	三上 佳子	39
8) 地域移動講座 in 近江八幡	前川 賴子	40
(5) 図書館連携講座		
1) 令和元年度第 10 回滋賀短期大学図書館連携講座 in 和邇	笹倉千佳弘	41
2) 令和元年度第 5 回滋賀短期大学図書館連携講座 in 浜大津	金澤 雄介	42
3) 令和元年度第 7 回滋賀短期大学図書館連携講座 in 堅田	伊澤 亮介	43
(6) 平野学区連携講座		
1) 令和元年度第 3 回平野学区連携教育講座	学長 秋山 元秀	44
(7) 滋賀短期大学全学的プロジェクト		
1) 第 2 回幼児教育アカデミー in S H I G A T A N	久米 央也	45
2) 第 3 回幼児教育アカデミー in S H I G A T A N	北尾 岳夫	46
(8) 乳幼児総合研究所		
1) 乳幼児総合研究所の今後の願い	前川 賴子・濱崎 由紀・松井 典子・松井 瑞季	47

6. 高大連携事業

(1) 滋賀県教育委員会の連続講座	49
(2) 滋賀県高等学校への出前授業	49

○資料

新聞などに掲載された記事（平成 30 年 1 月～12 月まで）	51
----------------------------------	----

1. 地域連携教育研究センターの体制

1. 目的

地域連携教育研究センターは、本学の研究活動の向上に関わる支援とともに、地域連携に関わる教育研究の推進等を目的とする。

2. 実施体制

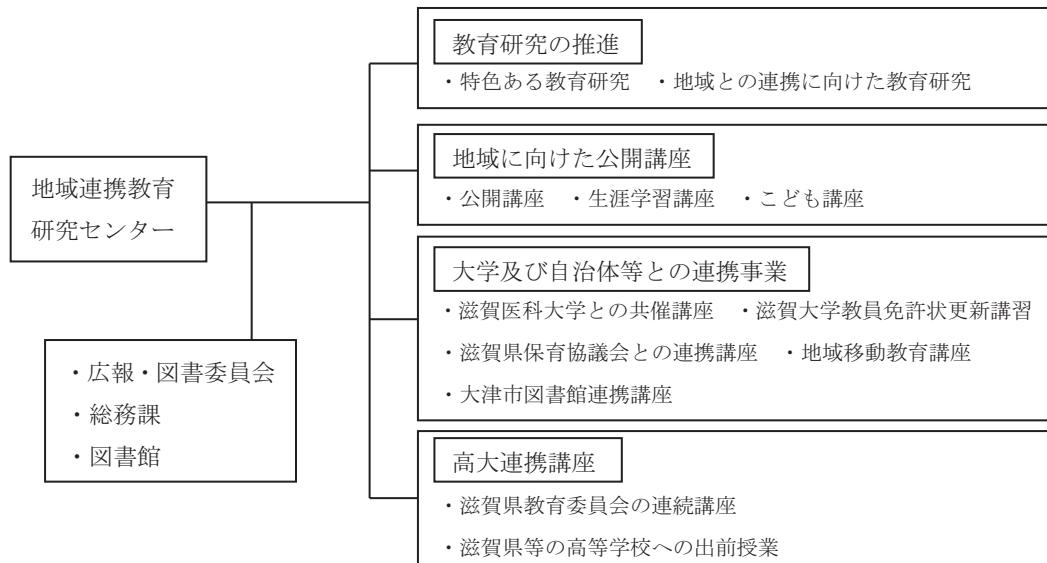
(1) 実施組織について

地域連携教育研究センターは、上記の目的を達成するため、センター長、副センター長、広報・図書委員会委員、総務課及び図書館職員によって組織される。

地域連携教育研究センターの構成（2019年度）

氏名	所属・職名	備考
深尾 秀一	幼児教育保育教授	センター長、図書館長
久米 央也	幼児教育保育学科准教授	副センター長
山岡ひとみ	生活学科講師	広報・図書委員会委員
岸田みさき	生活学科特任助手	
永久 欣也	幼児教育保育学科特任教授	
堀池喜八郎	ビジネスコミュニケーション学科特任教授	
吉田 英史	総務課長兼図書館室長	図書館職員
山本眞砂子	総務課係長兼地域連携教育研究センター係長	総務課職員

(2) 実施体制図



2. 調査研究プロジェクト

(1) 保育者養成校における主体的・対話的な学びにつながる指導案作成の 指導過程の検討プロジェクト

幼児教育保育学科 三上 佳子

1. はじめに

2回生の1回生時に行った「保育実習Ⅰ」の振り返りでは、わからなかつたことや困ったこととして「指導案の立案の仕方」「実習簿の記述について」「園の先生への声かけのタイミング」が上位に挙がっていた。本研究では、学生同士や教員との対話によって自身の指導案を改善していくように、指導案作成の指導過程を検討する。また指導案の記述の変化やアンケートから、どのような指導方法が主体的・対話的な学びにつながるかを明らかにしていく。

2. 活動内容

(1) 指導案作成時における【学んでほしい3つの姿】より、指導過程を検討

指導案作成の授業で子どもも理解や保育の基本を学ぶために、指導過程をより具体的にする必要がある。そこで、指導案作成時に【学んでほしい3つの姿】「①子どもの様子や活動を具体的にイメージして記述する」「②学生同士や教員との対話を通して、いろいろな考えに触れ、環境構成や援助を記述する」「③考えを出し合った指導案を基に模擬保育とし、保育者の具体的な言動を記述する」を視点に指導過程を検討する。

(2) 前期実習指導の指導案作成の評価(調査)より、指導過程の検証

前期の実習直前指導時、履修者を対象に「指導案作成時に学んでほしい3つ姿」を視点としたアンケート調査を実施し、指導案指導方法について検証する。

3. 総括

指導案作成過程において、クラスや子どもの様子・活動をイメージして指導案を作成することの必要性や、子どもの予想される活動を具体的に記述することが子ども理解や援助につながることに気付く学生が多かった。また学生同士や教員と互いの指導案を見せ合い話し合う中で、いろいろな考え方を知ることができ環境構成や援助が具体的になったり、予想される子どもの活動を受けて言葉がけを考えている学生も多く見られた。実習指導後も学生同士が主体的にわからないことを相談したり、教え合ったりし部分実習の情報交換をする姿もみられた。指導案に対して同じ負担感を感じている学生同士が、教員とともに指導案を作成する過程で多様な考え方につれ熟考していくことの意義や、ともに支え合う体制が持てたことは成果であると言える。

今後、指導案の指導過程において、学生が主体的に指導案を作成する場づくりの工夫もしていきたい。また、滋賀短期大学附属幼稚園や次年度開設される保育園と連携し、課題としている模擬保育についても、研究を進めていきたいと考えている。

なお、本研究は平成31年度の学長裁量経費により支援を受けたことを付記し、謝意を表する。

(2) 資格試験対策を利用した調理技術向上の取り組み

生活学科 原 知子

1. はじめに

調理の基礎知識と技術習得の一環として、本学にて「家庭料理技能検定」の資格試験を導入している。一般の人々対象の健康を維持するための食生活の基礎を学ぶ目的を持つ資格ではあるが、実技試験もあり、技術向上のために試験対策を実施している。これまでに、ポイントを抑えて練習することによる上達効果が大きい傾向が認められたので、検証例を得るべく試験対策を実施した。

2. 家庭料理技能検定について

現在は5、4、3、2、準1、1級がある。筆記のみの5、4級は主に小中学生対象の「食事の基本」「食育やマナーにおける基礎知識」を身につける狙いがある。3級以上は筆記と実技があり、栄養・調理の基礎知識及び基礎技術レベル、2級からは年齢・性別等に応じた献立作成ができる、上級ではより料理のレパートリーも広く、もてなし料理の技術等も求められる。本学にて試験実施するのは、5～1級の筆記試験と3、2級の実技試験である。3級は食以外の学生にも生活の基本技術として必要な内容であり、他学では食育に携わる保育士等の受験も多い。

2019年度実技課題は、3級では事前に問題が公開されており、きゅうりの輪切りとスクランブルエッグ、2級は大根の千切り又はリンゴの丸剥きと炒飯又はポークソテーピーマンソテー添え、であった。昨年度からの受験者のうち3級、2級において5名が優秀賞をいただき、そのうち1名は学外で実施される準1級にも合格した。また現1年生1名が3級で文部科学大臣賞を受賞した。

3. 調理技術の上達のために

本報告では実技対策を通じた調理技術について記述する。

モーションキャプチャー等の機器設備がないため、実技練習においては包丁の使い方、目視による力の入れ方について確認しながら課題を繰り返した。①本人が目ざす出来上がりを明確にし、②例えば基礎技術の「胡瓜を3mm以下の輪切りにする」という課題に対してまず3mmの長さの基準を明確にし、実際に切ったものを全て測定して初めて、いかに3mmの感覚が実際とズレているかに気付く。従って、客観的に表現できる形にして検証することを繰り返す③胡瓜では同様に全てが同じ厚さになるように意識を向ける。各ポイントに集中することと、結果を詳細に検証しながら練習できるのは、資格試験という目標が明確なためにモチベーション維持につながったと考えられた。

4. まとめ

個々の調理において、汎用的な必要項目（めざすべき特性）を達成することが完成度の高い調理となる。それについて全国の調理教育の指導者とともに確認したうえで、検定という目標を設定して訓練することで、挑戦した学生たちが着実に調理技術を向上させた。

なお、本教育研究は、2019年度学長裁量経費により支援を受けたことを付記し、謝意を表します。

(3) 介護旅行サービス人材の育成について

ビジネスコミュニケーション学科 江見 和明

1. はじめに

私は近年、介護旅行サービスに関心を持ち、研究に取り組んでいる。様々な企業の担当者にお話を伺う中で、近畿日本ツーリストに勤務されている伴流高志氏が取り組んでいる地域トラベルサポートー養成研修について知った。令和元年8月と9月に私自身が、この地域トラベルサポートー養成研修に参加してきた。ここでは、自身の経験をもとに、本研修の内容について紹介する。

2. 地域トラベルサポートーとは

トラベルサポートー制度は、1998年に当時近畿日本ツーリスト（株）クラブツーリズム事業本部に勤務していた伴流氏が始めたものである。同社の会員顧客で介護資格を持つ人にサポートーになってもらい、介助を必要とする旅行者のお手伝いをするというサービスである。この制度は、多くの人に旅行を楽しむ機会を提供したが、一方でトラベルサポートーはすべての行程に同行するため、利用者の経済的な負担が大きいという面があった。そこで考えられたのが、地域トラベルサポートーの仕組みである。地域トラベルサポートーとは、介護経験と知識を持った有資格者（介護福祉士、介護職員初任者研修修了者、看護師）で、「地域トラベルサポートー養成研修」を修了した人をいう。現地で旅行社を出迎え、その人に必要なサポートを提供する。①出発地からトラベルサポートーについてもらうよりも交通費、宿泊費、日当などの経済的負担が少なくて済む、②地元住民なのでよりよい観光案内ができる。③地域の雇用拡大につながり、介護職従事者の収入増、受入れ地域の介護事業所による新規事業の創出につながるというメリットがある。

3. 研修内容について

この研修は、4日間で行われた。前半の2日間は基本的に座学である。長野駅近くのもんぜんぶら座という施設の会議室で行われた。1日目は、ガイダンスと伴流氏の自己紹介、そして参加者が自己紹介をした後、バリアフリー観光の基礎についてレクチャーがあった。その後、バリアフリーの現状についての説明があった。2日目は、障がい者旅行ニーズ、バリアフリー旅行の社会資源について学んだ。後半の2日間は観光地実習で、戸隠神社で行われた。3日目は、室内での車いす講習、視覚障がい者・高齢者疑似体験、砂利道、高い段差などにおける車いす介助実習が行われた。4日目はJINRIKIというけん引式車いす補助装置を使った車いす実習と、実際に観光地を案内しながら車いすを押す訓練、急な坂道を安全に車いすで移動する訓練が行われた。

4. さいごに

本研修を受講して、旅行介助に必要な車いす操作などのスキルはもちろん、障がい者に関する法律やバリアフリーの取組みに関する歴史について体系的に学ぶことができた。また、交通機関が実施している障がい者の割引制度などについても知ることができた。来年度、本研修を大津市でも実施することについて、伴流氏の協力を得ることができた。是非、実現したいと考えている。なお、本研究は令和元年度の学長裁量経費により支援を受けたことを付記し、謝意を表する。

(4) 幼児向けマナー教材と実施プログラムの開発 ～地域交流を目指して～

ビジネスコミュニケーション学科 若生真理子

1. はじめに

日常生活の場で人と関わる機会が減少したことによる幼児のコミュニケーション能力の低下が問題となっている。本研究ではマナーを、「相手を思いやる気持ちとその表現の仕方」と定義し、他者との相互作用の際に用いられる社会的スキルの観点から幼児向けカードゲームを開発することとした。幼児が遊びを通して周囲の人達との関わり方について考える場を持つことは、「幼稚園教育要領」に示された小学校との円滑な接続という点において有効であると考える。

2. 活動内容

幼児用行動評定尺度を参考に、人間関係の基本である挨拶の言葉と相手を思いやる言葉の中から幼児の発達段階に合わせた表現をそれぞれ 12 ずつ選んで「挨拶編」「生活編」とし、幼稚園児にわかりやすい端的な文章で表した「読み札カード」と読み札の場面を表現した「絵カード」を作成した。「絵カード」には、滋賀短期大学のキャラクターであるしーたんを加え、ぼうずめくりに似たルールで遊ぶプログラムを考案した。対面でのやり取りを通してマナーを定着させることを目的に、滋賀短期大学附属幼稚園で「しーたんめくり」と「かるた」遊びの予備実践を行った。



預かり保育の子どもたちを対象に「挨拶編」のカードを用いて「しーたんめくり」と「かるた」のプログラムを実施した。最初に、大判の「絵カード」に描かれている人物の表情やしぐさを見て挨拶の言葉を皆で一緒に考えてから、3~4名のグループに分かれてゲームを行った。親しみやすい絵とわかりやすい文章により、年少児から年長児まで興味をもってカードゲームに取り組んでくれた。「しーたんめくり」はカードをめくるというワクワク感に加えて、しーたんの表情や動作をまねしてみることもあって反応は大きかった。「かるた」では、年長児の勝負へのこだわりが強く枚数を多くとることに意識がむいていた。

次に、年長児約30名を対象に「生活編」のカードゲームを実施した。「絵カード」については、こちらの意図とは異なる場面として認識し、「読み札カード」とは別の言葉が出てきたため、絵の人物の表情やしぐさに改良を加えた。



3. 総括

予備実践では、「楽しく取り組める」「描かれた人物の表情やしぐさを見て様々な言葉がでてくる」という結果は見えた。しかし、「かるた」に関しては、年長児は多くのカードを取ることを優先するため、本来の目的達成につながるか疑問が残るが、実践の様子からは「相手への思いやりを意識する」ということは見てとれた。今後は、附属幼稚園の先生方のアドバイスを受けながらプログラムを完成させ、その効果を検証していきたい。また、「カード」を家に持ち帰り、家族と遊びながらマナーについて考えてもらうことや、高齢者施設での実施など、地域交流にもいかせると考えている。

なお、本研究は令和元年度学長裁量経費により支援を受けたこと、滋賀短期大学附属幼稚園の先生方にご協力いただいたことを付記し、感謝の意を表する。

(5) 学生主体の地域連携活動による子育て支援の試み（2）

～乳幼児のための音のできるおもちゃ（楽器）制作プロジェクトを通して～

幼児教育保育学科 松井 典子

1. はじめに

本プロジェクトは、2018年度より引き続き、専門演習（松井クラス）の学生と社会福祉法人湘南学園障害福祉サービス事業所れもん会社（以下れもん会社）と共同で乳幼児のための音のできるおもちゃを発案・制作し、乳幼児とその保護者に紹介することを目的としている。音のできるおもちゃ制作を通じて、乳幼児の発達や五感を使った音あそびを学生が主体的に研究する。さらに、本プロジェクトでは、音を感受することや聴く力、想像力（創造力）、思考力、コミュニケーション力（プレゼンテーション）等多様なスキルを総合的に身に付けることを目指す。

2. 活動内容

本プロジェクトの事前学習として、日常の音や身近な音への気づきを促すワーク、身近な素材や自然物を使った手作り楽器の制作、本学乳幼児総合研究所「すみれがーでん」に設置されたおもちゃの種類、素材、対象年齢、あそび方等について調査した。以下に本プロジェクトの活動日程及び内容を示す。

第1回 5月14日（火）プロジェクトのスタート（顔合わせ）

れもん会社へ訪問し、本プロジェクトの趣旨を確認した。また、れもん会社の施設見学、素材（木やさをり織り）の説明、れもん会社のおもちゃの紹介があった。

第2回 7月9日（火）プレゼンテーション①

本学において、学生による音のできるおもちゃのテーマ（コンセプト）をれもん会社に提示し、意見交換を行った。

制作にあたり、おもちゃの安全基準（STマーク）について学習した。

第3回 10月28日（月）プレゼンテーション②

本学において、プレゼンテーション①におけるれもん会社からの提案を受け、改良案を提示した。討議を重ね、2019年度の音のできるおもちゃを決定し、制作をスタートさせた。

第4回 11月19日（火）プレゼンテーション③

本学において、学生が制作した音のできるおもちゃの試作を示し、おもちゃの安全性や保育実践における留意点を確認した。

第5回 12月5日（木）すみれがーでんにおける保育実践

3. 総括

今年度は、視覚+音、感触+音等、様々な感覚を組み合わせ、親子で一緒に作り、遊ぶことができる音のできるおもちゃを発案することができた。本研究は、今年度もれもん会社の多大なご協力を賜り、実現することができた。深く御礼申し上げる。

なお、本研究は令和元年度の学長裁量経費により支援を受けたことを付記し、謝意を表する。

(6) 幼児教育における数学的思考力を育てる教材開発プロジェクト

幼児教育保育学科 久米 央也

1. はじめに

幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型こども園教育・保育要領において、幼児期の終わりまでに育てたい10の姿が明記され、「数量・図形への関心や感覚」を育成することが明記された。

本年度は、これまで研究してきた「手遊び歌にある算数的活動」「日常的な活動や遊びの中にある算数的活動の分析」「数量・図形への関心・感覚が高める環境構成のあり方」についての研究をもとに、今までの研究をまとめるとともに、園児の日常生活や遊びの中に見える「算数的活動」を保育者がどう見抜き、適切な援助、声かけをしていけばいいかに焦点を当てて研究を深めていった。また、数量・図形への関心・感覚が高まる教材を開発し、公立幼稚園での検証を行った。

2. 活動内容

保育現場において、どのような算数的活動が、どのような生活場面で生まれているのかについて、公立幼稚園4歳児5歳児日常の姿を観察・分析し内在する「幼児期の算数的活動」を分析するとともに、どのような声かけをすればより一層算数的活動を意識するのか、どのように環境を再構成すれば、算数的活動が深まりと広がりをみせるのか、公立幼稚園教諭と共に共同で研究分析し一覧表にまとめた。(24事例)

「幼児期の算数的活動」における保育者のかかわり例（抜粋 他22事例）

年齢	場面・環境構成等	園児の姿	算数的活動	保育者のかかわり	園児の姿の変容	変容後の保育者のかかわり
4歳児	片付けの時間を、時計の絵を描いて知らせる。	絵と時計を見比べる。	測定2	「絵と同じ時間になつたね」と声をかける。 徐々に長針の数字を口頭で伝える。	長針の様子を見て、時間を知る。	「言っていた数字になつたね」と声をかける。
5歳児	大なわとびで遊ぶ。	数を数えるが途中からずれたり、数字を間違えたりする。	計数1 数唱	一緒に数を数える。	教師の声に合わせて数える。	「みんなもしっかりと数を教えられたね」と声をかける。

園児の姿と保育者のかかわりをさらに分析し声かけを分類し一般化を図った。その結果、「①気づきを促す保育者の言葉がけ」「②自覚が生まれる言葉がけ」「③保育者が一緒に活動する」「④気づきを促す保育者の行動」「⑤算数的活動が深まる環境の再構成」「⑥算数的活動が広がる環境の再構成」に分類することができた。また、教材の開発についても取り組み、公立幼稚園で検証した。

3. 総括

数量、図形の関心・感覚を育成するため、どのような環境を構成し、どのような声かけや環境の再構成をしていけばよいかについて十分研究されていないのが現状である。今後、教材開発も含めた事例集を作成していきたい。

なお、本研究は平成31年度の学長裁量経費により支援を受けたことを付記し、謝意を表する。

(7) 幼児の粘土遊びにおける 教育プログラム/教材・素材 研究

幼児教育保育学科 深尾 秀一

1. はじめに

土の粘土は、造形性の高さや、感覚的、触覚的教育としてメリットの大きい教材であることは明らかである。しかし、土の粘土は管理やハンドリングなどの難しさから土の粘土の活動を行っていない幼稚園も多い。この研究は、土の粘土の取り扱いを整理し、活動のための教材・プログラムを作成し、教員が土の粘土に関わりやすくすることによって、土の粘土を使用した表現活動を通して感性を広げ、子どもの探求心と造形への関心を育成することを目的としている。

全学的研究の1つとしてとして、三ヵ年計画で進めてきた最終年度である今年度は、乾燥した粘土による子どもたちの活動を考察し、過去に検証した、粉、泥、粘土、乾燥という4つの状態での活動プログラムを完成させた。

2. 活動内容

2019年10月に滋賀短期大学附属幼稚園のテラス園庭において、年長2クラスの園児を対象として、朝の登園直後の自由遊びの時間に、粘土遊びの活動を行った。粘土は、昨年度使用した粘土を約4mmの厚さの板状に切り分け、十分に乾燥をさせておいた。当日は、子どもたちが登園する前に、幼稚園のテラスに敷いたブルーシートの上に乾燥させた粘土をおき準備をした。

乾燥した粘土を使い子どもたちからは、「形探しをする、割る、粉にする、パズルをする、絵を描く、踏む、集める」などの通常の粘土遊びでは行われない活動がみられた。

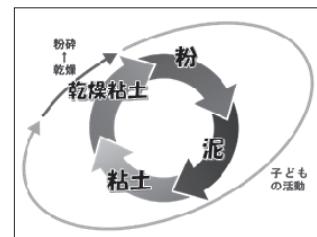


3. おわりに

今回の活動から、粉から泥、泥から粘土、粘土から乾燥粘土板、そして粉碎というすべての過程を、保育者の援助を得ながら子どもたちがかかわり行えることが分かった。そして、活動のプロセス、素材とのかかわりにおいて、子どもたち自身の様々な遊びが生まれてくることも3年間の実践と研究において明らかになった。

子どもたちの表現活動の根幹といえる、感じる、楽しむという行為において、粘土遊びの活動を通して、素材の様々な状態とのかかわりから、子どもたちの遊び心が「触発」するという結果が検証された。

なお、本研究は令和元年度の学長裁量経費により支援を受けたことを付記し謝意を表する。



(8) Les Rencontres de Calenzana ～カレンツァーナ国際音楽祭参加報告～

幼児教育保育学科 柚木たまみ

1. はじめに

筆者は 2019 年度学長裁量経費の補助を受け、2019 年 8 月 17 日から 22 日の 6 日間、フランスコルシカ島カレンツァーナにて開催された国際音楽祭 Les Rencontres de Calenzana に参加した。

音楽祭ではマスタークラスに参加し、最終日にはコンサートに出演した。ここではその参加報告をする。

2. Les Rencontres de Calenzana の概要

コルシカ島は地中海西部に浮かぶ、面積約 8,680 km²、人口は 30.2 万人のフランス領の島である。何よりもナポレオン 1 世、そしてコロンブスの出身地として有名である。

国際音楽祭 Les Rencontres de Calenzana は、コルシカ島北西部の町カルヴィから車で 20 分ばかりの距離に位置する、標高 400m のカレンツァーナという小さな村で毎年 8 月に行われている。国内外の演奏家を招いて演奏会を行ない、同時に学生や演奏家のための講習会(マスタークラス)も実施しており、2019 年で開催 19 回目を迎えた。連日大小様々な規模とジャンルの演奏会が朝、昼、夜と開催される。大きな教会の聖堂やカフェ、村役場、また野外広場に設けられた特設ステージ等が会場となり、クラシック音楽を中心に、ポピュラー音楽による気軽なプログラムもありバラエティに富んだ構成である。

筆者が参加したフランス国立ストラスブル音楽院教授小林真理氏による声楽マスタークラスでは、一日に午前と午後、一人 2 回ずつのレッスンが毎日、6 日間あった。参加者は、毎日自分のレッスンを受講しながら他の受講者のレッスンを自由に聴講することができる。

3. 修了演奏会

2019 年は J. オッフェンバック生誕 200 年の記念年であったことから、オッフェンバックのオペレッタ作品を中心に、フランスのオペラ、オペレッタというテーマで演奏会を行なった。筆者は A. メサジェのオペレッタ作品からのアリアを演奏した。

村の中心にある、サン=ブレーズ教会礼拝堂において、コンサートは行われた。このコンサートがマスタークラスの成果披露であり、修了演奏会となった。伴奏ピアニストが、フランス国立パリ高等音楽院ピアノ教授であるドゥニ・パスカル氏であったことは特筆すべき点である。

4. 今後の活動の展望

今回筆者は、自身が課題としている 20 世紀の作曲家による歌曲作品の研鑽を主要な目的としてマスタークラスに参加したわけであるが、演奏会出演のために課されたオペレッタという課題は、本来の研究対象とは異なるものであったにもかかわらず、新しい研究テーマの切り口と追究の可能性を見出すきっかけとなった。そしてまた新たなレパートリー作りへの可能性を感じている。

最後に、この時空間に身を投じることに対してご理解を示してくださりご支援いただいた秋山学長先生、ならびに幼児教育保育学科の教員の皆様に心から謝意を申し上げます。

3. 地域との連携による教育研究活動

(1) ふるさと竜王夏祭り

生活学科 服部 聖羅

1. はじめに

8月3日（土）竜王で2年に一度行われる「ふるさと竜王夏祭り」に、本学が提携させて頂いている竜王道の駅かがみの里様と共同で出店させて頂いた。2017年に続き、今回が2度目の参加となった。

2. 活動内容

今回のイベントでは、ビジネスコミュニケーション学科とベーカリー塾が参加した。ベーカリー塾は、竜王産の桃とブルーベリーを使った冷菓「ブランマンジェ」を石井教授監修のもと製作し、ビジネスコミュニケーション学科は、デザート販売で使用する商品ラベルやポスターなどを作成。また、コンピューター占いを提供した。大きな声で呼びかけたり、ポスターを持って歩いたり、デザートを購入の方には占いを無料で行うといった学生たちのアイデアや工夫のおかげで、大好評に終わった。

3. まとめ

地域連携活動では、回数を重ねるごとに、参加する学生達の自ら進んで動く姿や工夫する姿が多くみられ、学生の成長にはとても驚かされる。また、今回のような、違う分野を学ぶ学生同士が協力し合い、お互いを高め合うことで、学生にとって良い刺激となり、良い結果につながっているのだと思う。他学科との取り組みは、より大きな達成感や団結力が生まれ、これは学生にとって、授業では学べないとても貴重な経験である。今後も他学科との交流を深めながら、様々な活動に参加したい。



(2) zeze ときめき坂ハロウィン

生活学科 服部 聖羅

1. はじめに

令和元年10月27日（日）膳所駅前広場にて「zeze ときめき坂ハロウィン」が開催され、ベーカリー塾が参加した。このイベントは、地域活性化を目的に10年前から開催され、平野学区を中心とした周辺の自治会や企業、学校などが参加している。

2. 活動内容

今回、秋の食材を使った焼き菓子を2種類販売（焼き芋のタルト、紅茶のシフォンケーキ）した。また、食健康コースにご協力頂き、かぼちゃと麹を使った特製ポタージュも一緒に販売した。食べ物には、季節を感じさせることで味わいをより深くし、ポタージュを調理しながら販売することで、香り高く出来たてを提供し、人を惹きつける工夫をした。イベント当日は、少し肌寒い秋晴れの日で、出店や仮装パレードが行われ、たくさんの人で賑わった。かぼちゃがほんのり香る中、たくさんの方に商品を手に取って頂いた。

3. まとめ

日頃からお世話になっている地域での素晴らしいイベントに毎年お声がけ頂き、ベーカリー塾として活動ができることを嬉しく思う。また、地域の方々との交流を深めていく中で、地域に生かされている事、支えられている事を実感した。このような素敵なかん境の中で、経験を積めることに感謝し、今後もこのようなイベントに積極的に参加したい。



(3) ヘキセンハウスの制作

生活学科 服部 聖羅

1. はじめに

びわ湖大津プリンスホテルより依頼されていたヘキセンハウスの製作も今年度で 7 年目を迎え、今年度から石井明教授の指導の下、ベーカリー塾の 2 回生が中心となり、活動した。

2. 活動内容

「年に一度のサンタ島へのつどい」をテーマに、びわ湖を舞台としたヘキセンハウスは、クリスマスまでの約 1 か月間ホテルのロビーに展示された。小麦粉、砂糖、卵、蜂蜜、アーモンドプードルなどを使用したレープクーヘンという生地を用いて組み立て、マジパン一つ一つにストーリー性を追求したヘキセンハウスは、どこを見ても楽しめるよう工夫がされている。学生がテーマを決め、イメージを膨らませながら製作し、完成させるまでに約 1 か月かかった。

今年度も展示期間を延長し、12 月 26 日以降はお正月バージョンに装飾を変えて、1 月以降も展示された。

3. まとめ

毎年恒例となったヘキセンハウスの活動は、ベーカリー塾最大のイベントであり、集大成である。ホテルの顔となるものを作る責任感と、モノづくりの楽しさを感じながら活動できることは、本当に幸せなことだと思う。学生にとって、テーマやストーリーを考え、イメージを膨らませることや、完成後の達成感と自信が身につく事は、大変貴重な経験であり、今後の成長に大きくつながると思う。毎年、このような機会を与えて頂いているびわ湖大津プリンスホテルの方々に感謝するとともに、プライベートの時間を削ってヘキセンハウスを完成させた学生を称えたい。また、今後もこのような地域連携活動を通して、学生にたくさんの経験を与えられる環境づくりに努めたい。



(4) 近鉄リテーリング（大津サービスエリア下り）と生活学科食健康コース2回生の メニュー開発プロジェクト ～滋賀県の食材を使った丼ぶりとデザートのメニュー考案～

生活学科 山岡ひとみ

1. はじめに

近鉄（近畿日本鉄道株式会社）が運営しているびわこ近鉄レストラン（名神高速道路大津サービスエリア内）は、地産食材を使用した料理や商品開発を推進している。これまでに、滋賀短期大学生活学科食健康コースの学生と産学連携しながら、滋賀の地産食材を使用した新メニューの開発及びその考案メニューのレストランラインアップなど、学生の視点を取り入れた地産商品のPR活動をレストラン運営に取り入れてきた。今回は肉（牛・豚・鶏いづれか）を使用した6種類の丼ぶり（和・洋・中華）とデザートを考案しコンテストを行ったことについて報告する。

2. 活動内容

滋賀県外から大津サービスエリアに立ち寄るお客様が、滋賀を感じ・味わってもらうために、滋賀県の食材を利用して学生の斬新なアイデアを取り入れ、栄養価を管理したメニュー提案を行っている。メニュー提案をするにあたりサービスエリア内やお客様の雰囲気などを知ることが必要であるため、大津サービスエリアの見学と施設概要の説明を受けてメニュー考案を始めている。コンテスト開催までに近鉄リテーリングの料理長、支配人に来ていただき盛り付けの工夫、食材の組み合わせ、味付けなどのご指導をいただき、再検討と再試食を行いコンテストに望んだ。メニューの選出方法は、近鉄リテーリング、西日本高速道路会社、滋賀短期大学の教員が審査員となり、実食審査、調理審査、プレゼンテーション審査を行い、グランプリ、準グランプリ、審査員特別賞が選ばれた。

3. まとめ

試行錯誤して取り組んだメニューはコンテストの形で評価され、今までの取り組みを振り返ることができ、今後の取り組みに対する意欲を高めることにつながった。学生からの達成感や喜びを感じ、貴重な経験を作っていた近鉄リテーリングのみなさまには感謝の意を表す。滋賀県の食材を使ってメニューを考案することは、地産地消と滋賀県の活性化につながり、栄養士として活躍する場において地元の食材が扱えることは強みとなる。自信を持って活躍できる栄養士になれるように、今後もこのような取り組みを続けていきたい。



(5) びわ湖こどもの国チャレンジ合宿 ～食事サポート隊の活動～

生活学科 岡田 香織・豊岡 真莉・岸田みさき・中平真由巳

1. はじめに

滋賀県安曇川にあるびわ湖こどもの国と連携し、平成 21 年から子ども料理教室を行っており、今回は小学生を対象に行う 1 泊 2 日のキャンプ活動である。本学からは食事サポート隊を結成し 4 名が参加した。

2. 活動内容

1 日目の夕食から 2 日目の昼食までの献立を事前にこちらで考え調理を行った。1 日目の夕食ではバーベキューとスープ、2 日目朝食は卵焼きと豚汁、昼食ではピザ釜を使用したピザ作りを行った。食事スタッフとして副菜やデザートの準備もしながら、学生も指導者となり児童の調理のサポートをした。

学生においては食事以外の時間も花火やカヌー、夏野菜等の収穫などを児童と共に体験し、キャンプ場内での児童の引率、衣・食・住のサポートも行った。

3. まとめ

参加児童同士または参加児童と学生スタッフほとんどが初対面という環境であったが、すぐに打ち解け、学生・教員共に有意義なキャンプとなった。チャレンジ合宿の名の通り、火をおこすところから始めたバーベキューや炊飯、ピザ釜でのピザ作りは学生にとっても貴重な体験となった。初めての体験にも興味を持ち、「チャレンジする」子どもたちと共に行動するなかで、学生も積極的に行動する姿を見ることができた。便利となった普段の生活では感じられない難しさを知ると共に、自然の中で調理する楽しさや現代機器に頼らずとも調理できることの素晴らしさを実感する良い機会となった。また、今回は予定には無かった新鮮な鮎をいただき、急遽メニューに追加するなど、応用力を身につけることもできた。調理することの楽しさ、自然の恵をいただくことへの感謝、「おいしい」を共有する仲間がいる喜びをより感じながら食事をすることができ、食育の観点からも非常に良い経験であったと思う。

食事サポートをはじめとする、1 泊 2 日という集団生活の中で経験したことや学んだことは多くは、栄養士として働くにあたり非常に価値あるものであったと考える。学生の今後に活かされることを願っている。



4. 地域に向けた公開講座

(1) 公開講座

1) クラシック音楽の愉しみ ～木管五重奏の響～

元日本センチュリー交響楽団ファゴット奏者 宮本 謙二

1. はじめに

室内楽とは様々な楽器で様々な組み合わせによって音楽を楽しむジャンルである。最も有名な組み合わせは弦楽四重奏、ピアノ三重奏で、この他には木管八重奏、金管五重奏さらに弦楽器と管楽器を組み合わせたものがある。今回はその中から木管五重奏を取り上げ、その魅力を楽しむ講座である。

2. 活動内容

木管五重奏の編成はフルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、ホルンである。木管楽器は形も大きさも発音体もそれぞれ違う。ちなみに弦楽器は形状も発音の仕方は同じであるが、楽器の大きさだけが違う。まずフルートは今や金属でできているのが主流だが、かつては木でできていた歌口に横笛で直接に息を吹き込んで音を出す。他の木管楽器はリード（植物の葦を加工したもの）を使用するが、クラリネットは1枚のリードを楽器のマウスピースにつけて、またオーボエやファゴットは2枚のリードを重ねて振動させて音を出す。そしてフルートとクラリネットは円筒管、オーボエとファゴットは円錐管、さらにフルートの全長は65cm、ファゴットの全長2m60cmと楽器の大きさもそれぞれ違う。楽器は大きくなればなるほど低い音が出る。木管楽器の魅力は何といってもそれぞれの楽器の音色に特色があり発音体の違う楽器で、その楽器同士が交わって醸し出す響きが色彩感を豊かにすることである。



3. 総括

本講座では個々の楽器の音色を紹介しながら、時代の違う楽曲（ニールセン 木管五重奏曲、ミヨー 組曲「ルネ王の暖炉」）を紹介した。昨年に引き続いての講座だったので、さらにフルート属のピッコロ、オーボエ属のコールアングレという楽器も合わせて紹介した。また、各楽器が奏でるオーケストラの名旋律をクイズ形式で聴講者に回答してもらい参加型の演奏会であった。

(2) 生涯学習講座

1) 銅版画教室

～おもしろくてたまらない銅版画の魅力を～

滋賀短期大学 名誉教授 前川 秀治

1. はじめに

今年度も初心者から経験者までを対象の5日間の銅版画実技講座を開催した。「銅版画」は、1420～1430年頃に生まれた直刻法が起源であり、長い歴史を持つ。今や銅版画に取り組む作家も多いが、しかし一般的にはまだまだ馴染みが薄い。銅板に凹みをつくりインクを詰めて紙に刷るというシンプルな版形式である。気楽に試みてみれば、おもしろくてたまらない造形表現の幅と奥行きとが実感できる。そのような銅版画の魅力を楽しんでもらおうと講座を開催した。

2. 講座内容

「版画」「銅版画」の基本的な事柄について資料を基に解説。胴板に凹みをつくりインクを詰めて紙に刷り取ることで、予想を超えた自分独自の美の表現が出来るという体験講座として、基本的な版種による取り組みを展開した。腐食で偶然的にできた肌合いのイメージから、ドライポイント（直接引っ搔き凹みをつくる版種）で製版と刷りで1作。次にエッチング（酸で腐食する線描の版種）とアクアチント（腐食で面の濃淡の調子をつける版種）で次の1作の計2作を制作した。なお、リピーターや経験者には自由制作を主に取り組んでいただくこととした。



3. 総括

5日間の限られた講座で、大きな版に挑んだり、その上、試し刷りと加筆を繰り返す回数を重ねたりして、一人一人かなりの達成感を感じられたと思う。受講者数も少なく、一人一人の想いと制作のプロセスに丁寧に添うことが出来た。もう少し一緒に制作する仲間が多ければ、学びと喜びの幅も広がる筈で残念である。京都銅版画教室のメンバーにも声かけをして複数回参加された方も、そちらの方で満足されているようで今年は不参加、次は卒業生に働きかけようかなどと思う。

結果としてそれぞれ2点余の完成度の高い良い作品が完成出来たこと。何よりも「おもしろかった」との感想は有り難い限りで、本講座の目的は達成できたものと思う。夏の暑さにも負けず受講していただいたみなさんの熱意には敬意を表したい。

(2) 生涯学習講座

2) 楽しくつくるお菓子

～ナツツを使ったお菓子・紅茶を使ったお菓子～

生活学科 石井 明

1. はじめに

すみれキャリア講座「たのしく作るお菓子」として令和元年より携わる。お菓子づくりの魅力を知り、作業手順を学びながら楽しく作り、家庭でも作ってもらえるようにした。

2. 活動内容

8月 20日(火)「ナツツを使ったお菓子」

アーモンドを使ったフロランタン

数種類のナツツを使ったキャラメルナツツのタルトレット

8月 28日(水)「紅茶を使ったお菓子」

紅茶(アールグレー)を使用したガトー・バスク

紅茶(アールグレー)を使用したケーキ・フィナンシェ

3. 総括

私の講座は初めてなので参加してもらえるか心配していましたが、受付開始から 3 日で両日共、予定人数を超えてしまい、受付終了となり、まだまだ参加希望があり、嬉しい悲鳴となる。

この講座を楽しみにしてもらえるように努力し、魅力のある講座にしていかなければという使命感を感じた。

お菓子は複数人のグループで作り、堅苦しくなく参加者同士のコミュニケーションを取りながら、楽しそうな雰囲気であった。来年も楽しみにしていますと声をかけていただき、参加される方には満足していただける講座にしていきたい。



(2) 生涯学習講座

3) 滋賀の食材を使ってアイデア料理 ～手軽・おいしい・健康的な食事～

生活学科 山岡ひとみ

1. はじめに

滋賀県の伝統食は、湖魚や地域の特色ある野菜を使った栄養的にバランスのよい健康的な食事である。伝統食を食べている家庭が多いため、他府県に比べて伝統食が多く存在しており、滋賀県民の食卓にかかせない存在である。しかし、若い世代にとっては受け入れられにくい伝統食もあるため、伝統食を食べない若い世代が増えてきている。このような状況が続くことでこれまで食べられてきた伝統食が消えてしまう可能性が考えられる。伝統食は、その時にとれる旬の食材を無駄なく食べるための調理加工技術の賜物でもあり、年を重ねた時に当時の食卓を囲む温かな家庭の思い出が蘇り心の癒しとなり豊かな生活に繋がる。滋賀県の伝統食に親しみをもてるよう、若い世代の好みに合わせて食べやすい伝統食を提案することは、伝統食に興味を持つきっかけにもなる。また、地産地食材を使って手軽に作ることは地域の活性化にも繋がる。若い世代向けに、簡単においしく作れる伝統食のアレンジのレシピ本「クックしが」を発刊しており、その中から季節に合わせた料理を選び調理実習を行ったので報告する。

2. 活動内容

2019年8月30日（金）に滋賀短期大学の調理学実習室で行った。参加者は、19名で男性3名、女性16名であった。5班に分かれて、「ゴリたま」、「下田なすのミルフィーユ」、「水口かんぴょうの具だくさんスープ」、「ふなずしのチョコレートケーキ」の4品を各班で調理を行った。

3. まとめ

地産食材は、種類によってはスーパーなどで取り扱いのない食材が多く、簡単に手に入れることができない。今回の参加者も、名前は知っているが食べたことのない人も多くいた。そのため、伝統食を知らない方へ伝統食を知ってもらえる機会になり、また、簡単に作れておいしく新しい食べ方を提案することができて参加者の皆様に満足していただけたように感じた。

これからも、地域の方に喜んでもらえ地域が活性化する取り組みを続けていきたい。



(2) 生涯学習講座

4) スウェーデンハンドセラピー ～背中に触れるヒーリング～

滋賀短期大学 非常勤講師 朝野 典子

1. はじめに

スウェーデンハンドセラピーは、背中や手足にやさしく触れることによりオキシトシン（別名：愛情ホルモン、安心ホルモン）の分泌を促し、さまざまな心身の症状を緩和する手技である。1960年代にスウェーデンで生まれ、日本では医療や福祉分野を中心に徐々に普及しつつある。オキシトシンには、人と人との信頼関係を築き、良好な人間関係を深める働きが認められている。心身の不調を抱える人、リラックスを望む人のために役立つことを願って、着衣のままでおこなう背中の施術体験を実施した。

2. 活動内容

セラピーの背景理解のため、スウェーデンの概要と特色を簡単に紹介した。受講者は、スウェーデン社会の多様性や充実した社会保障等に関心を示した。次に、講師が背中の施術のデモンストレーションをおこないながら手順を説明し、このセラピーが大切にしている「触れることによるコミュニケーション」の理念と施術の留意点を述べた。続いての実技体験では、受講者が2人1組となり、施術の練習を交代しながらおこなった。初対面の受講者同士も、練習を終える頃にはすっかり打ち解けた様子で、会場はなごやかな空気に包まれた。

3. 総括

講座終了後には、「早速、家族に試してみたい」、「手や足のセラピーも習ってみたい」等の声が上がり、受講者の関心の高さが窺えた。手のひらの温かさを通して、身近な人とのコミュニケーションを深めていただけるよう期待している。



施術の練習風景

(3) こども講座

1) こども陶芸教室

～カップと小皿に絵付け、オリジナル食器を作ろう～

湖陶焼 長養窯 深田 猛

1. はじめに

私は、こども陶芸教室に、平成27年より携わっている。

一時の陶芸ブームといわれた頃からは少し熱はさめてはいるが、まだまだ関心を持っておられる方もすくなくないようである。

2. 活動内容

今回も、出来上がった素焼きの湯飲みとお皿に、顔料釉薬（赤、ピンク、水色、黄緑、黄色）と鉄顔料による茶色、大正黒の黒色、以上の七つの顔料を使って、自由に図柄を考え、色付けしてもらい、1,254度の温度で焼成した。

3. 総括

今日、情報化社会となって、自分の生活にアイデンティティを確立する事の難しい時代になったといえるかもしれない。

しかし、いつの時代も哲学する事が重要である。哲学と言っても先哲の後をたどるだけではない。手を動かし、物を作ることの中にこそ、本当の哲学があるのではないかと思っている。

十分に絵心のある方、細かなキャラクターを小さな画面に詰め込もうとする方、また自由奔放に顔料を塗りつける方、それぞれ力量は違うが、無形の顔料から有形の作品に成る醍醐味を少しは味わっていただけたのではないかと思っている。

これからも受講者一人ひとりのアイデンティティの支えになるような作品作りができ、また自分が作った湯飲みやお皿を使う楽しみを知っていただき、そういう表現、楽しみのお手伝いができれば幸いと願っている。



(3) こども講座

2) こどもフラワーアレンジ教室

～サマーフラワーアレンジ～

グラティチュード flower designer 鷺崎奈美代

1. はじめに

こどもフラワーアレンジ教室も今年で9年目を迎えた。今年もひまわりを基調に夏らしいアレンジを楽しんでいただいた。

2. 活動内容

はじめに、今回アレンジするお花の説明をした。子どもたちは熱心にメモを取り、集中してお話を聞いてくれた。次にはさみの使い方を説明してアレンジメントのデモストレーションをやってみせた。子どもたちの自由な発想を大事にしたいという思いから、なるべくシンプルに基本的なアレンジにまとめた。一通り説明をした後に花材を配り、子どもたちには自由にアレンジを楽しんでもらった。材料を使いきってボリュームのあるアレンジをする子。すこしゅつたりと空間を作つてアレンジする子。かわいく小さめにアレンジする子。それぞれとても個性的で素敵な作品ばかりであった。

出来上がった作品を前の机に並べて、みんなで作品発表会を行つた。

3. 総括

例年、希望者は多いが、今年は定員を超える22名の参加があり、毎年参加してくれる方も初めての方も思い切りの良さを感じた。しかし、毎年参加し、経験を重ねている子ども達は、全体のバランスを見てデザイン構成を考えたり、花の特長を捉えて工夫する姿が見られ成長を感じることができた。

毎年お花の好きな子ども達が参加してくれるので、制作中に花が折れてもそれを大事に持ち帰るなど草花を大切に思う気持ちに心打たれる場面がある。

これからも、子どもたちの植物を大切にする気持ちに寄り添いながら、楽しいフラワー アレンジ教室を開催して行きたい。



(3) こども講座

3) こども書道教室（小学校 1・2 年生）

～硬筆の練習～

読売書法会理事 中村 哲堂

1. はじめに

小学 1・2 年生を対象にした硬筆講座で、1 年生 10 名、2 年生 6 名の計 16 名が参加した。

姿勢や鉛筆の持ち方を正しくして、文字をていねいに書くことをテーマにした。

2. 活動内容

1 年生 8 文字、2 年生 14 文字の文章をノートに練習し、その後清書用紙に仕上げた。

姿勢や鉛筆の持ち方に注意して 1 文字 1 文字ていねいに書いて、何度も繰り返し練習した。力が入って姿勢が前かがみになるのを注意しながら、文字の大きさや中心を揃えて練習した。

一生懸命お手本を見ながら、きれいな線がひけるようになって完成度を高めていった。

3. 総括

手で書いた文字は相手にも伝わります。

ゆっくりていねいに書いて、気持ちよく、読める字を心がけて書くように願っています。



(3) こども講座

4) こども書道教室（小学校 3～6 年生）

～夏休みの課題を書こう～

読売書法会理事 中村 哲堂

1. はじめに

小学 3～6 年生を対象にした毛筆講座で、3 年生 5 名、4 年生 4 名、5 年生 6 名、6 年生 4 名の計 19 名が参加した。

姿勢を正しくして、文字をていねいに書くことをテーマにした。夏休み中の講座であるので、夏休みの宿題（JA の書道作品）を練習し、仕上げた。

2. 活動内容

1 回目の練習は姿勢、筆の持ち方、墨の含ませ方などを指導した。 筆圧や運筆速度などに注意して、筆に慣れてもらった。

2 回目は作品を仕上げる為、何度も何度も前回の事を注意しながら書いた。

3. 総括

お手本をよく見て、ゆっくりていねいに書けるようになった。 文字の大きさや、中心が揃い、完成度の高い作品が仕上がった。

真剣に取り組み、何度も書いた作品には、子供らしい豊かな表現が出てきた。筆で書く楽しさを感じてくれた。今後も永く書道を続けて欲しいと願う。



(3) こども講座

5) こどもラボラトリー ～食べ物の不思議～

生活学科 清水まゆみ・灰藤友里子・岡田 香織・岸田みさき・豊岡 真莉

1. はじめに

こどもラボラトリーは小学生を対象とし、身近な食品を分析することで科学的な考え方ができる力を養うとともに、食べ物自体への理解を深めることを目的とした。

2. 講座内容

「食べ物の不思議」をテーマとし、今回はビタミンCについて調べた。まず、ビタミンCについて説明した。ビタミンは微量で体の調子を整える働きがあり、ほとんどが人体では合成できないので食物から摂取しなければならない必須栄養素である。この中のビタミンCは、抗酸化作用をもつ、結合組織を作るたんぱく質であるコラーゲンの合成に必要である、鉄の吸収を促進するなど、さまざまな代謝に関与している。ビタミンCが不足すると、結合組織が弱くなって出血する壊血病の症状を呈する。ビタミンCには還元型ビタミンC（アスコルビン酸）と酸化型ビタミンC（デヒドロアスコルビン酸）があり、還元型は空気中の酸素で容易に酸化されて酸化型になる。さらに酸化が進んでジケトグロン酸になるとビタミンC効力はなくなり、損失しやすいビタミンである。ビタミンCは野菜や果実に多く含まれることから、果実中のビタミンCの実験を行った。市販の果実飲料（果汁100%）を試料とし、インドフェノール法で還元型ビタミンCの濃度を調べた。その結果、パインアップルジュース、りんごジュースにはビタミンCが含まれているが、これらよりオレンジジュース、グレープフルーツジュースの柑橘系ジュースにははるかに多くのビタミンCが存在することがわかった。次に野菜を試料とし、きゅうり、大根、玉ねぎの搾汁にもビタミンCが含まれていることを確認した。一方で、きゅうりはアスコルビン酸酸化酵素を含み、この酵素は酸、食塩、加熱で失活することが知られている。これについても実験で確かめてみた。ビタミンC溶液にきゅうりの搾汁を加えると、ビタミンCは明らかに減少した。しかし、食塩または食酢を追加したものではビタミンCは減少しなかった。

3. 総括

酸化型インドフェノールにビタミンCを滴加すると、濃青色から無色に変化するという方法でビタミンCを定量した。精密器具を用いずに簡単な操作で行ったので、小学校低学年のこどもたちも楽しんで実験できた。今回の講座でビタミンCについて理解が深まり、「ビタミンCの大切さがわかった」、「野菜や果物は嫌いだけれどこれからは食べようと思った」、「アスコルビン酸酸化酵素を初めて知った」、「きゅうりには塩をかけて食べる」などの感想が寄せられた。今後の食生活に活かしてもらえればと思う。

(3) こども講座

6) こどもドライポイント教室

滋賀短期大学 名誉教授 前川 秀治

1. はじめに

京都で毎年アートフェスティバルのワークショップで、ドライポイント（銅板を鋭利な鉛筆などで直接引っ搔き凹みをつくる版種）を楽しんでもらうのだが、短時間の製版で随分よい作品ができる。特に4歳児の数分で出来た作品が秀逸で、感動を覚えた。まさに大人顔負けである。

教育現場でも銅版画は影が薄いし、小・中学校でも必ず有ったものなのに教育大学ですらエッチングプレスは不要とのこと、美術教育にも隔世の感を覚える。

そこで、子どもならではの引っ搔く快感での心身共に充足できる造形表現のドライポイントの講座を展開することとした。



2. 講座内容

初日2時間で製版と試し刷りの予定でスタート。難しいインフォーメーションは避けて、子どもや作家の作例を実物や映像で鑑賞し、凹版のドライポイントの理解を図る。本来の美しさの観点から銅版で展開するところ小学生の初体験に考慮し、原画・下絵から製

版がスムーズにできるよう透明の塩化ビニール板で製版する。刷りの工程は、アルバイト学生の手助けを得て手早く美しく…と願った。

2日目で、初日の試刷をもとに加筆して完成度を上げて、子ども主体のイメージで仕上げ刷りと一緒に出来るように取り組んだ。

3. 総括

定員一杯のこどもたち、手一杯で時間配分等も心配していたが、「何を描こうか、描きたいか」の導入も不要な程こどもたちの事前の心構えがあり、これまでのこども講座事業の厚みに驚いた、感謝。事前のアルバイト学生との打ち合わせが無くとも、臨機応変の手助けにまた感謝である。

集中力が切れるか心配の低学年も2時間で、高学年であればもう1日欲しい等々思っていたが、2日間の講座は丁度良かったと思う。一人一人の想いがニードルでクラッチの快音と快感で生まれた良い作品、そして、1日しか来られなかった子どもやその保護者とも関わり熱意にまた感動。

やりがいある講座で満足しているが、6年生は来年受講できないの?の声に、どうするかな。

5. 大学及び自治体等との連携事業

(1) 滋賀医科大学との共催公開講座

1) 筋肉と健康

ビジネスコミュニケーション学科 堀池喜八郎

1. はじめに

令和元年度の滋賀医科大学との共催公開講座を8月10日（土）に本学で開催した。今回のテーマは「筋肉と健康」である。永久欣也特任教授の司会のもと、滋賀医科大学・小笠原副学長の挨拶に始まり、3つの講演が行われ、秋山元秀学長の謝辞で午前の講演の部を終えた。引きつづき希望者による調理実習を実施した。

2. 講座の概要

1. 講演の部

滋賀短期大学3号館 SUMIREホール（311教室） 午前9時30分～午前11時20分

「筋肉と健康とのかかわり」 馬場重樹講師（滋賀医大・栄養治療部）

「サルコペニア対策を運動から考える」 岩井宏治 理学療法士（医大病院・リハビリ部）

「サルコペニア対策を食事から考える」 丈達知子 管理栄養士（医大病院・栄養治療部）

2. 調理実習の部

滋賀短期大学3号館 調理実習室・試食室 午前11時30分～午後3時

「筋肉の減少を予防～豊富なたんぱく質でバランスのとれた食事～」

山岡ひとみ講師（生活学科）

安原祥子管理栄養士（医大病院・栄養治療部）

3. まとめ

馬場講師は、フレイル（虚弱）の概念・予防・回復法、サルコペニアの定義や診断基準などについて話された。岩井理学療法士は、筋力をつける4つ運動（片脚立ち・スクワット・踵上げ・フロントランジ）を実演で紹介された。丈達管理栄養士は、低栄養のチェックやタンパク質摂取の具体的献立などについて話された。講演内容は「運動して、十分に食事（タンパク質）をとる」「運動は強力な薬である」とまとめられる。病気を予防し健康に過ごすには、結局様々な食品をバランスよく食べ（基本は「主食+主菜+副菜」がそろったお膳）、ふだんから運動することが大切である。

午後からの調理実習は、山岡講師や安原管理栄養士の指導のもと、グループに分かれて行ったが、生活学科の教員と学生が一丸となって補助をされた。参加の皆さんには楽しく真剣に実習をされ、できあがった食事を和やかな雰囲気のなかでいただいた。

健康寿命への関心は非常に高く、講演の部では135名もの参加があり大盛況であった。アンケート結果でも健康や病気予防への関心の高さがみられ、次回もこれらを希望するものが多かった。

(1) 滋賀医科大学との共催公開講座

2) サルコペニア対策を運動から考える

滋賀医科大学医学部附属病院リハビリテーション部 主任理学療法士 岩井 宏治

1. はじめに

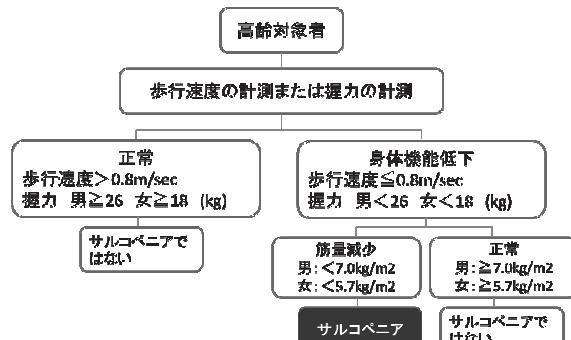
サルコペニアは筋肉を意味する「Sarx」と喪失を意味する「Penia」を掛け合わせた造語である。サルコペニアは、身体的な障害や生活の質の低下、および死などの有害な転帰のリスクを伴うものであり、進行性および全身性の骨格筋量および、骨格筋力の低下を特徴とする症候群とされる。今後、世界では少なくとも 5000 万人以上、この先 40 年で 2 億人を超えると見込まれている。

2. 活動内容

サルコペニアは加齢のみが原因の原発性サルコペニアと、その他が原因の二次性サルコペニアに分類される。二次性サルコペニアのうち、活動によるサルコペニアは廃用性筋萎縮と考えればよい。栄養によるサルコペニアは、エネルギー摂取不足による飢餓で生じる。疾患によるサルコペニアは、侵襲、悪液質、原疾患に分類される。診断は比較的容易である。右図に AWGS (Asian Working Group for Sarcopenia) の基準を示すが、筋力低下（握力男 26 kg、女 18 kg 未満）もしくは身体機能低下（歩行速度 0.8m/s 未満）を認め、骨格筋量減少も認めた場合にサルコペニアと診断される。

現時点でサルコペニアに対する介入として重要視されているのは運動である。運動にはインスリン様成長因子 (IGF-1) に代

表される骨格筋の同化関連ホルモンの血中濃度を高める効果があるとされている。また、レジスタンストレーニングは高齢者であっても、骨格筋量増加や筋力増強効果が認められている。さらに、栄養と運動を併用することで更なる相乗効果が期待できることが報告されており、十分な栄養を担保したうえでの運動が重要である。



3. 総括

高齢社会の到来によりサルコペニアと診断される高齢者は今後ますます増加することが予測される。その中でサルコペニア対策として運動による介入が効果的であることは明らかである。また、診断されてからの治療的介入も重要であるが、より初期の段階から予防的に介入することが今後さらに重要であろう。

(2) 滋賀大学教員免許状更新講習

豊かな感性を育む—音楽と絵本—

1) 絵本の教材研究と読み聞かせの方法について

幼児教育保育学科 浜崎 由紀

1. はじめに

幼児教育保育において絵本の読み聞かせは、日常的に行われている。本講習では、保育者からの一方向の読み聞かせではなく、子どもが主体的に関わる読み聞かせとは何かを考えるために、絵本の選書（教材研究）や読み聞かせの方法からアプローチし、考察した。当日は、現場の先生方に普段子どもの前で読んでおられる絵本を1冊お持ちいただき、受講者同士で読み聞かせをおこなった。絵本を通した実践報告も相互で行い、情報交換の場にもなった。

2. 講習内容

講習では、まず「絵本とは何か」を確認した。最近では、絵本の種類が多様化し、作者の表現活動の一つとして捉えられている作品もある。絵（イラストレーション）と言葉（テキスト）と本という形態からなる絵本は、総合芸術とも呼ばれる。子どもたちにどのような文化を選択し、届けるかは、周りにいる大人の大切な役割となる。加えて、言語を獲得する過程にいる子どもにとって、絵本の言葉は、食べ物と同様に子どもたちの育ちを支える基盤となる。そのため、選書には、今ここにいる子どもたちが何に興味や関心を持ち、絵本の何を楽しむと思うかを保育者自身が感じ取る感性が必要であることを確認した。さらに、絵本は思想性を持つため、選択には十分気を配り、保育者が子どもたちに何を伝えたいのか意図をもって選択する必要があることもお伝えした。

次に絵本の読み聞かせの方法について説明した。子どもたちは、保育者の読み聞かせを聞く際、保育者の態度や視線を敏感に感じ取りながら物語を受容している。特に、保育者が子どもに視線を向けると、子どもは見られることを意識する。演劇の理論でいうところの「異化」の状態である。つまり、子どもは現実を意識し、思考を促すため、保育者とのコミュニケーションや周囲の子どもたちとの会話が促される。他方、保育者が視線を向けない場合、子どもは「同化」し、物語に感情移入しながら受容する。視線の有無の良し悪しではなく、保育者はこれらのこと理解し、ねらいに応じた読み聞かせの方法を選択する必要があることを確認した。

3. 終わりに

幼児教育保育における絵本の読み聞かせは、子どもとの双方向の営みによって成り立つ。決して保育者からの一方向の指導ではない。講習の内容を踏まえ、実際に受講者同士、絵本の読み聞かせを行った。先生方が子どもとの絵本にまつわるエピソードを楽しそうに語っておられ、日々の保育の様子がうかがえた。今後も、子どもが主体的に関わる絵本の読み聞かせが、保育現場に広がることを期待する。

(2) 滋賀大学教員免許状更新講習

豊かな感性を育む—音楽と絵本—

2) 子どもの豊かな感性と表現を育む音楽表現について

幼児教育保育学科 松井 典子

1. はじめに

2017年に改訂された幼稚園教育要領では、5領域のねらいを踏まえた遊びを通した活動において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示された。その姿の1つに「豊かな感性と表現」を育成することの重要性が明確化された。本講習では、音・ことば・リズムによる表現を総合的に捉え、豊かな感性と創造性に深く関わる幼児期の音の感受や音楽表現の特性について講義及び演習を行った。

2. 講習内容

本講習では、歌遊びや楽器遊びといった音楽表現遊びの原点となる「音」について聴いたり、考えたり、作ったりするワークを取り入れ、「音」を介した多様な表現方法を受講者と共に探究した。「音」という目には見えないものを私たちほどのように聴き、受けとめ、表出（表現）するのかを子どもの視点、大人の視点で考察した。

サウンド・ワークでは、意識的に音を聞くこと、音への気づき、さらに音を聞く耳を養うことの重要性を再確認した。グループワークでは、身近なモノを使って様々な音をうみだすこと、モノの音やリズムで表現すること、オノマトペ（擬音語）を用いて声で表現すること等、「音」を介した様々な表現遊びを実践した。実践を通じ、子どもの表現を支え、表現の育ちをつなぐ保育者の役割について考察した。

講座の最後に今日的課題である保育空間の音環境について述べた。まず、子どもの聴覚の特性について述べ、子どもと大人の聴こえの違いを解説した。さらに、WHO や欧米諸国の騒音レベルのルールと日本の現状とを比較した。その上で、子どもをとりまく保育空間の音環境の課題、音の環境が子どもや保育者にどのような影響を与えるのか、現在、取り組まれている保育現場における音環境の応急措置を映像で示し、具体的な対策法について言及した。

3. 総括

子どもの感性や表現を育むためには、保育者が子どもの表現に気づき、受けとめ、共感することが重要となる。そのためには、保育者自身が日々の生活の身近な環境の音に耳を傾け、音に親しみ、感じ、楽しむことが子どもの感性を養い、表現を育むことに繋がることを強調した。

さらに、子どもが音を楽しんだり、音の違いに気づいたり、音を自由に表現できる環境について再確認し、目に見えない音の環境をいかに整えていくかが今後の課題となることを提言した。

(3) 滋賀県保育協議会との連携講座

1) 令和元年度滋賀県家庭的保育推進事業の基礎研修

幼児教育保育学科 前川 順子

1. はじめに

家庭的保育は、乳幼児を対象とした少人数制の異年齢保育サービスの一つである。

家庭的保育に期待される待機児童対策という面も重要であるが、それだけでなく、低年齢の子どもの保育のあり方として、家庭的環境で、個別性に配慮しながら、丁寧な保育を行うことの意義も大きいと考えられる。

今年度も、滋賀県保育協議会が実施する家庭的保育事業および小規模保育事業（B型・C型）に従事しようとされる基礎研修が滋賀短期大学を会場に進めた。

2. 研修内容

(1) 家庭的保育の概要

- ①わが国における家庭的保育の歴史的経緯や位置づけを把握する。
- ②家庭的保育の特徴を理解し、保育所保育との共通点、相違点を把握する。
- ③家庭的保育の意義およびリスクについて把握する。

(2) 家庭的保育の運営と管理

- ①家庭的保育事業者が行うべき運営管理について学ぶ。
- ②情報提供の方法、受託前の利用者との面接、記録や報告の管理、労務管理や財務管理などについて学び、安定的な運営を心がける。

(3) 保護者への対応

- ①家庭的保育は、保護者と保育者が協力して子どもの発達を支えるとともに、保護者の子育てを支援する。
- ②保護者との対応において、保護者との信頼関係が大切である。その信頼関係作りや保護者への支援が必要な関わり方について、事例などを通して学ぶ。

(4) グループ討議

- ①テーマについて、討議の方法を学ぶ。

3. まとめ

家庭的基礎研修の最後は、受講生を8つのグループに分け討議を行った。家庭的保育の実践に向けて、家庭的保育の理解を深め、また、不安や問題点についても話し合い、解決策を見出す機会でもあった。職種や経験も様々なメンバーでのグループではあったが、討議を行うにあたっては、事前にテーマを与えられていて、グループ内で司会や記録といった役割分担をし、バズゼッションという事前に説明を聞きスタートしたこと、和やかな雰囲気のもと討議もより深まった。今後「質」の確保された家庭的保育を期待している。

（注）家庭的保育の基本と実践 第3版 家庭的保育研究会 福村出版

(4) 地域移動講座

1) 地域移動講座 in 守山

滋賀短期大学 名誉教授 前川 秀治

1. はじめに

守山市保育幼稚園課との連携により、季節的な遊びや保育への配慮のもと、守山市立速野幼稚園に於いて、2019年1月7日午後、市の研修報告会の後14:30~16:30の2時間、無謀にも約70名もの保育士や幼稚園教諭を対象とする「はんあそびと版画表現」の講演および実技演習を展開した。

2. 講座内容

はじめに（5分）、続けて先に紙版の製版（乾燥のため）（10分）

次に、インフォーメーション（25分）で子どものためのはんあそびや版による表現、および版画の種類と作品例を資料とPowerPointの画像で紹介し、基本的な事柄と保育例などの理解を図る。

5~7名のテーブルごとの共同研究、実技演習を展開し・・・コツと仕掛けについて学ぶ（75分）（後片付けに+10分）次の【「スタンピング」を美しく押して楽しむために...】と【「紙版」をつくり、その刷りのバリエーションであそびと表現を考える】の実技演習を展開した。

3. 総括

参加者の顔ぶれをみて、多少は同窓会を感じる程の和やかな雰囲気で、気軽に挨拶と自己紹介から始めた。前以て、用紙やインク等の材料については本学の美術研究室でご準備をいただいたものを活用。資料や作例等の画像はこれまでの研究の中で集めたものをもとに、鑑賞・研修いただいた。（多少、学生の作例や子どもの作例に時代が感じられ、直近2~3年のものを用意できたら良かったと反省している）しかし、地域を越えての作例紹介でそれぞれ何らかに有効に参考にしていただいたと感じた。

参加園・所ごとに、ゴムローラーやパレット、バレンなど用具をご持参いただき、会場設営もグループテーブル編成で、ブルーシート敷きの、5~7名で（幼稚机2脚）×10~12グループの会場の遊戯室一杯の満員状態であったが、誠に快適な実技演習会場にとご準備いただいた。

実技演習においては、なじみ深いスティックプリント（はん遊び）と紙版であるが、美しく子どもも満足する基本的な摺りのありかたや、くふう次第でさまざまな版の形式を活用することによって、新しい版の概念を革新しつつ、版による遊びと表現の驚きと美しさ、それらの開発と可能性を感じていただくよう、実技演習を展開した。

それぞれ、出来た作品と刷りのバリエーションを振り返りながら、何らかの研修成果を得ていただいたかなと思う。まるで・・・宴の後かと思える程の拍手のなか会場を後にして、何とか連携の一助となつたならば…、有り難く思う。準備万端、委員会と園・所、速野幼稚園に感謝です。

(4) 地域移動講座

2) 地域移動講座 in 大津

地域連携教育研究センター

滋賀県内において、地域の教育機関との連携のもとに地域移動型教育講座を開催し、幼児教育に
関わる教職員の研修等の機会を提供することを目的に、下記のとおり開催した。

1. 事業名称

地域移動講座 in 大津

2. 期日

平成 31 年 1 月 17 日（木） 午後 3 時 30 分から午後 5 時

3. 会場

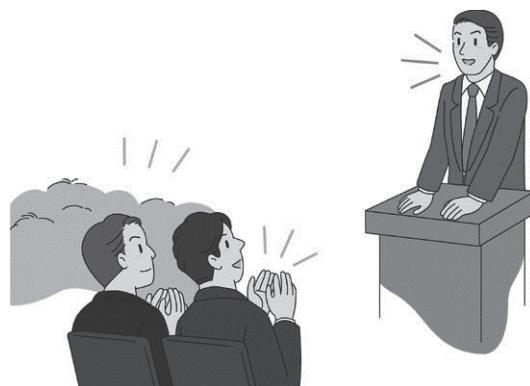
大津市立市民文化会館

〒520-0037 大津市御陵町 2-3 Tel 077-522-7165

4. 開催内容

講演題目：幼児理解に基づく保育者の援助

講 演 者：滋賀短期大学 幼児教育保育学科 准教授 李 霞



(4) 地域移動講座

3) 地域移動講座 in 長浜

幼児教育保育学科 久米 央也

1. はじめに

令和元年7月1日、長浜市役所高月支所において、地域連携教育講座を開催した。この講座は長浜市教育センター自己啓発研修との連携のもと、幼稚園、保育所、認定こども園研修会「自己啓発研修 乳幼児講座」として「保幼こ・小接続を考える～お互いを知ることから始める保育・授業改善～」をテーマに講演を行った。

2. 講演内容

幼稚園教育要領をはじめとする3法令の改訂（改定）に伴い、就学前教育と小学校教育との滑らかな接続の大切さが強調された。それに伴い、就学前教育・小学校教育が滑らかな接続のためにどう変わらなければならないのかについて、お互いの立場から具体例をもとに講演した。

まず、小学校教員から見た幼児教育のすばらしさについて次の2つの視点から話をする。

幼児教育のすばらしさの一つに「ねらいを持った意図的環境構成」が挙げられる。雑草も環境であることをもとにして、環境を通して学ぶ幼児教育の基本について確認した。幼児教育の基本を再確認することで、原点に立ち返り自分の保育のあり方を見つめなおしてほしいと思ったからである。

二つ目は「人的環境」のすばらしさである。園児へのかかわり方一つで、その子の伸び育ちが保証されることを、「けんか」を例に話をする。けんか、もめごとが起きても、すぐに手を出さず見守ること、そして「どうしよう、どうしたらいい？」とかかわることで、子どもに判断させて行動させる学びを誘発している。ハプニングが起きてもそれを学びに変える保育者のすばらしさについて述べた。

次に、小学校教育がどう変わらなければならないかについて、「心が動く」保育の学びを接続するために小学校授業において「心が動く」材との出会いを大切にすべきであることを具体的授業をもとに説明する。

最後に、幼児教育がどう変わらなければならないかについて「幼児期の終わりまでに育てたい10の姿」をもとに話をする。遊びを通した学びを大切にしながら、保育者は10の姿や3つの資質能力を頭の片隅において常にアンテナを張り、学びが見えたときに瞬時に声かけをしたり、環境再構成をしたりすることの大切さを、「風車が回った」を例に話をする。

3.まとめ

小学校との接続の重要性はまだまだ浸透していないが、長浜市ではいち早くこのテーマを取り上げ研修し、多くの先生方が熱心に参加してくれた。今後も、小学校との滑らかな接続実現に向か、具体的実践例を集め講義していきたいと思う。

(4) 地域移動講座

4) 地域移動講座 in 甲賀

幼児教育保育学科 永久 欣也

1. はじめに

令和元年 7 月 17 日（水）、甲賀市碧水ホールにて地域移動講座 in 甲賀を開催した。甲賀市と共に開催し、甲賀市幼稚園・保育園・認定こども園・家庭的保育室等職員研修会として「子どもの見取りと保育の環境」をテーマに講演した。

2. 講演内容

今回のテーマである「子どもの見取りと保育の環境」は、甲賀市の保育幼稚園課が令和元年度のスローガンとされていたものもあるが、子ども理解の視点と、子どもや保育者を取り巻く環境の変化について話しを進めていった。

まず、「子どもの見取り」については、子どもの見方として、「子ども自身を見る」「子どもとその環境を見る」「子どもと人間関係を見る」など様々な方法があることを説明し、こどもを理解するポイントとして、「こどもを肯定的に見ること」「活動の意味を理解すること」「発達する姿を捉えること」「集団と個の関係を捉えること」「保育・教育活動を見直すこと」の 5 つが大切であることをお伝えし、新指導要領などに書かれている「幼児期の終わりにまでに育ってほしい 10 の姿」とのかかわりについても説明を行った。

次に、「保育の環境」についてでは、「人的環境」「物的環境」「自然環境」「社会環境」などといったこととの関わりや、年々、子どもを取り巻く環境はもとより、保育者を取り巻く環境も大きく変わってきたことを紹介した。とりわけ、最近、多くの園が直面され苦労されていることに保育の国際化問題があることを紹介し、今後ますます滋賀県下においても多文化共生の保育の必要性が求められていくことに対しては、園と保護者と行政との連携を密にすることがさらに必要となっていくことをお伝えした。

最後に、保育環境の質の評価とその尺度のために ECERS（エカーズ：保育環境スケール）というものがあることを紹介し、保育環境を総合的に評価していくことの大切さを説明した。

3. おわりに

今回の研修の開始時刻は 18 時からということもあり、先生方の多くは平日の平常勤務を終えられてすぐの研修会への参加であったが、それでも 100 名前後の教職員の方々が参加してくださった。お疲れの中を参加くださった先生方の期待に十分応えられたとは言えないであろうが、みなさん熱心に聴いてくださり、また、質問もしてくださり、今後の保育・教育活動に少しでも役立てていただければ幸いである。

(4) 地域移動講座

5) 地域移動講座 in 東近江

幼児教育保育学科 深尾 秀一

1. はじめに

令和元年8月28日（水）の15時から17時まで、東近江市愛東あいあい幼稚園において、東近江市こども未来部幼児教育センターとの共催講座として、地域移動講座が開催された。

テーマを『子どもとねんどあそび』として演習を含めた講座を行った。参加者は25名で、幅広い年代の参加者があった。

2. 内容

1) 領域表現のになうものと活動の実際

プロセスの重要性と子どもの探求心、および教材工夫の大切さについて

2) 粘土をさわって遊ぶことの意味

3) 粘土の状態とその表現の可能性

土粘土の状態における活動の違い

4) 土粘土の管理と準備について

5) 粉の粘土遊びと 乾燥させた粘土の板を使っての遊び・制作演習

3. まとめ

昨年度に引き続き、東近江市においては2回目となる地域移動講座の講師を務めた。昨年度と同じく参加者が真剣に研修に参加しておられ、保育者としての学び続ける熱い意識を感じられた講座となった。

「子どもとねんどあそび」という今回のテーマの中で、素材との触れ合いが、子どもたちにとって触媒となるということを体験し、考えていただいた。土粘土は、管理が大変で作品展を目指す教材としては取り扱いの難しいものであるが、子どもたちの造形表現の世界が広がることも理解していただいたのではないだろうか。今回の演習において粘土遊びを体験することによって、より一層子どもたちへのアプローチや援助の在り方が変わるはずである。また、粘土遊びの醍醐味と粘土のさまざまな状態から、触発される子どもの新しい活動の展開が、指導者の励みになるのではないだろうか。

今回の研修をもとに、子どもたちの生き生きとした造形活動が各園において展開されることを期待したい。

(4) 地域移動講座

6) 地域移動講座 in 高島

幼児教育保育学科 荻田 純久

1. はじめに

「過剰適応の発生機序と子どもとの関わり方」というタイトルで、高島市で勤務されている保育者の方を対象としてお話を参りました。今回のテーマに関しては高島市より依頼がありました。過剰適応の定義はさまざまなものがありますが、その一つに「外的適応が過剰なために、内的適応が困難に陥っている状態」というものがあります。1979年に田原総一郎氏が「中高年の反乱　過剰適応症の時代」という記事を書いておられるように過剰適応ということば自体は、決して真新しいものではなく、臨床的にはかなり使い込まれてきた言葉です。しかし、過剰適応そのものに関する研究は十分ではなく、発生機序等、不明な点も多い概念です。今回の依頼に関しては、どのように接すると子どもたちが過剰適応にならずに済むのか。その辺りの話を聞きたいという要望が背景にありました。最初は引き受けるかどうか正直迷いました。求められているものを提供することが出来ないのではないかという心配があったからです。熟考した結果、現時点で分かっていることを伝え、その上で私見を述べさせてもらおうと考え、引き受ける決心をしました。

2. 活動内容

最初に、なぜ過剰適応の研究が重要なのかという点についてお話しました。現在の教育現場の問題として不登校、いじめ、自殺等があります。こうした問題は増加傾向にあり、自殺に関しては、自殺した児童生徒が置かれていた状況が不明なケースが過半数あります。つまり、なぜ自殺したのか理由が定かではないケースが半分以上あるということです。周囲からすれば、何も問題がなさそうに思える。しかし、本人からすれば死にたいほど、それを実行したくなるほど大変な状況にあったという児童生徒が多数いるということです。

過剰適応の場合、本人が苦しんでいたとしても教師等の周囲の大からすれば適応しているように見えます。それ故に、長期間周囲から気付かれることもなく、周囲が気付いた時には、かなり深刻な問題になっていることもあります。不登校、いじめ、自殺を予防しようと思えば、周囲から明らかに不適応を起こしていると分かる児童生徒の研究をしていくだけでは不十分であり、過剰適応研究を進め、一見適応的に日々を過ごしていると思われる児童生徒のことも理解を深めていく必要があると思います。

上記のような話をした後に、これまでの過剰適応研究について説明をしました。とりわけ荻田が注目している利他行動、向社会的行動という切り口について、また発達的観点について詳細に説明をしました。

3. 総括

今回は高島市よりお題を頂いた上で講師を担当させて頂きました。今後は、さらに過剰適応研究を深め、自らを深化させていき、よりよい講演が出来るようになりたいと思います。このような機会を与えて頂き、有難うございました。

(4) 地域移動講座

7) 地域移動講座 in 大津

幼児教育保育学科 三上 佳子

1. はじめに

平成 30 年度の地域移動講座 in 大津は、大津市と滋賀短期大学の共催により、令和元年 9 月 19 日(木)大津市役所において開催された。大津市内の保育園や認定こども園の代表保育士 44 名を対象として、「保幼こ・小接続を考える～お互いを知ることから始める保育・授業の改善～」をテーマに講義とワークショップを行なった。

2. 講演内容

本講座では、前半が講義、後半がワークショップで実施した。講義では保幼・小の教職員が、子どもの成長を共有し、「主体的・対話的な学び」を進めていくためには、保育・教育の意識改革や連携の強化が求められている。講義では、「幼児教育の基本から学ぶ」「小学校がどう変わればいいのか」「保育・教育がどう変わればいいのか」について、映像等の事例等における演習も入れながら実施した。

ワークショップでは、資質・能力にも位置付けられている「思考力・判断力・表現力等」から、遊びの中の学びを体験する『ストローとんぼ』を制作し、実際に試したりする。

3. まとめ

対象者が幼児教育保育に携わり、小学校との連携の中心になっている代表保育士であったため、遊びを通して総合的に学ぶ幼児教育の基本を大切にしつつ、何が育っているのかを見取り何を育てるのか(ねらい)を明確にすることの意義も伝えた。

アンケートの自由記述欄では、「幼小のカリキュラムの違いは沢山ある。幼少期の子どもたちの発見、試す力を大切にして、遊びの姿をしっかりと見極めたいと思った」「若い職員に伝えるときのヒントを得た」という意見があった。

保育者としての第一歩は養成校から始まっている。今回は、中堅の保育者対象であったため、「保幼こ・小連携」や「子どもとの関わり」などキャリアに対応した課題を中心に講義を実施したが、今後、養成校の抱える課題と共有しながら、地域との協働を推進していきたい。



(4) 地域移動講座

8) 地域移動講座 in 近江八幡

幼児教育保育学科 前川 順子

1. はじめに

令和元年12月10日（火）に近江八幡市総合福祉センターに於いて地域移動講座 in 近江八幡を開催した。「子どもの興味が膨らむ保育教材」というテーマで、近江八幡市の幼稚園・保育園・認定こども園に勤務されている保育者の方を対象に講演とワークショップを実施した。

2. 講演内容

(1) 保育における「環境」の重要性

子どもが興味や関心をもち、子ども自身が主体的に「やりたい」「夢中になれる」ことに対して、一人一人の行動の理解と子どもの成長にふさわしい保育環境を構成していく。環境を設定していくにあたり意識することは、様々な活動に取り組むきっかけ作りをし、そこでやってみて、いろんなことに気づかせる。そこから工夫したり、子ども同士のやり取りが始まり楽しくなる。いろんなことを面白いと感じ、興味を持つ、この気持ちを育てていける環境構成について講話した。

(2) ワークショップ「にんじんさん だいこんさん ごぼうさん」のお話

参加者には、画用紙・包装紙を準備し、各自でコーン形を基本ににんじんとだいこんとごぼうを作り、それぞれ色柄の違う包装紙を使いカバーをつけ仕上げ、最後に代表者にストーリーに沿って演じていただいた。身近にある素材を使っての遊びでは受講者の方に好評であった。

3. まとめ

保育をしていくにあたり「環境」は、全ての領域に作用する位置にあり、相互に関連し合つてつくり出されている。その中で最も重要な、保育者をはじめとする人的環境であることを踏まえ、自らの資質向上を意識していただき、活動を豊かに行われることを期待したい。



(5) 図書館連携講座

1) 第10回滋賀短期大学図書館連携講座 in 和邇

生活学科 笹倉千佳弘

1. はじめに

2019年7月27日（土）、大津市立和邇図書館において、「宇宙人への手紙－人はいろいろであるということ－」というテーマで講演をおこなった。

最初に、「宇宙人への手紙」というワークをとおして人の多様性を確認し、次に、「学校に行っていない子ども」を例にしてかれらの多様性について考えた。最後にまとめとして、私の研究歴を紹介しながら、人の多様性についてこれまで考えてきたことをお話した。

2. 活動内容

(1) 人の多様性

宇宙人への手紙というのは、人間と出会うために初めて地球にやってくることになった宇宙あてに、人間について説明する手紙を書くというワークである。多くの人がこのような手紙を書くとき、多数派の人間をイメージしてそれを描写する。そのようにして書かれた手紙では、赤ん坊や障害のある人の存在が抜け落ちることが多い。私たちは、人が多様であるということを頭ではわかっている。しかしそれを、身体感覚としてわかるというのは難しいことなのかもしれない。

(2) 「学校に行っていない子ども」の多様性

多くの子どもが学校に行っている現状では、学校に行っていない子どもは少数派である。しかし、学校に行っていない子どもは、学校に籍があるかどうかで2つに大別することができる。つまり、学校に籍があつて学校に行っていない子どもと、学校に籍がなくて学校に行っていない子どもである。もちろん、学校に行っていない子どものうち、籍のある子どもが多数派であり、籍のない子どもが少数派である。学校に籍がなくて学校に行っていない子どもというのは、どのような子どもなのであろうか。たとえば、この世に誕生しても出生届が提出されなければ、かれはこの世に存在していないことになり、当然、学校に籍はない。

3. 総括

講演中だけでなく講演終了後も参加者のみなさんからいろいろな質問が寄せられ、活発な議論が交わされた。講演の準備や当日の質疑応答などをとおして、私自身、大いに勉強になった。この場を借りて、この講座に関係したすべての人に謝意の意を表したい。

(5) 図書館連携講座

2) 第5回滋賀短期大学図書館連携講座 in 浜大津

ビジネスコミュニケーション学科 金澤 雄介

1. はじめに

本講座では、「「ロマンス語」とは何か?—西ヨーロッパの言語をめぐる旅—」というテーマで、ロマンス語の特徴、歴史、日本語との関係について概説をおこなった。講座は 2019 年 9 月 21 日(土)に大津市立浜大津図書館においておこなわれた。

2. 活動内容

ロマンス語とは、古代ローマ帝国で話されていたラテン語を祖先とする言語の総称である。本講座の主な内容は以下の通りである。

(1) 主なロマンス語（ポルトガル語、スペイン語、フランス語、イタリア語、ルーマニア語など 10 言語）の特徴について解説をおこなった。

(2) ラテン語からロマンス語いたるまでの歴史的変化について、具体例を示しつつ概観した。またロマンス語の系統図を示し、「同じ系統に属する言語」を認定するための基準について解説した。

(3) ロマンス語の多様性と、その分類について説明した。ロマンス語は、西ロマンス語と東ロマンス語に分けられる。分類の基準として、語中の子音の弱化の有無と、語末の s の消失の有無を挙げた。またロマンス語の多様性は、異民族との言語接触によっても引き起こされることを示した。

(4) ロマンス語と日本語との関係

最後に、日本語におけるロマンス語由来の単語をいくつか紹介した。

3. 総括

受講生の皆さんからは多くの質問が寄せられ、活発な議論が交わされた。この講座が、ロマンス語を勉強するきっかけになるとうれしく思う。ロマンス語研究は、とりわけ欧米において長い歴史を持つ分野であるが、主要なロマンス語の陰に隠れた方言など、まだまだ研究の余地は残されていると言える。本学の授業において、自分の専門分野について講義をすることは皆無である。筆者の好きなことを、好きなように話す機会を与えてくださった深尾図書館長には感謝申し上げたい。最後になったが、講座の開催にあたっては大津市立浜大津図書館の皆さんにはお世話になった。この場を借りて感謝申し上げたい。



第 29 回国際ロマンス語学会にて
(2019 年 7 月、コペンハーゲン)

(5) 図書館連携講座

3) 第7回滋賀短期大学図書館連携講座 in 堅田

ビジネスコミュニケーション学科 伊澤 亮介

1. はじめに

2019年10月26日（土）、大津市立北図書館において「教養としてのベトナム」と題し、講演を行った。

現在、日本人は漢字を日本語の表記文字として当たり前のものだと考えているかもしれない。しかし、かつてはローマ字運動や漢字制限についての様々な議論、葛藤があった。そして、これからも漢字についての付き合い方は変化するはずであり、また変えていく必要がある。その変化を一部の専門家に任せず、日本語を使用する我々「普通の」日本人が主体的に考えていかなくてはならない。そのためには、かつて「漢字文化圏」に属した国・地域の近代化が、寧ろ漢字と漢字文化からの脱却の過程であったということを知ることは日本人にとって必須の教養であるといえるだろう。

本講座では、まず、ベトナムとベトナム語についての基礎知識を日本語と比較しつつ紹介した。そして、本論として、広く「漢字文化圏」の文字の近代化を概観しながら、中でも完全に漢字を廃止してアルファベット化へと舵を切ったベトナムの事情を詳しく解説し、決して漢字使用が自明ではないということ、そしてこれからも漢字を使い続けるのか否か、ということについて賛否両側の識者の意見を紹介しながら、受講生に考えてもらった。

2. 講演内容

以下のプログラムに従って講演を行った。

イントロダクション：漢字文化圏・儒教文化圏

1. ベトナムの基礎知識
2. ベトナム語の基礎知識
3. ベトナム語の呼称について
4. 文字について
5. ベトナム人の名前と漢字・漢語
6. 文字の「近代化」

エピローグ：漢字をやめる？

3. 総括

講演後のアンケートでは、「難しすぎる」、「題名を、文字の話、ことばの話が中心だと分かるものにすべきだ」といったもっともな指摘をいただいた。また、構成についてもう少し簡潔にできたと思っている。今後機会があれば改善したい。

(6) 平野学区連携講座

1) 第3回平野学区連携教育講座

『近江から滋賀へ—地域の歴史地理的特性から—』

学長 秋山 元秀

はじめに

近江という国はどのような特性をもっているのか、そしてその特性が、滋賀県という近代以降の地域にどのように受け継がれているのか。ここでは空間のレベルにあわせて3視点を提示する。最初は国(クニ)というレベルでの「道の国」という視点である。ついで道筋に生まれた中心性をもつ人や物の集まりを見る「あきないの町」という視点である。最後に生業を支える広がりとして空間をとらえた時の「魚米の郷」という視点である。この3視点は近江・滋賀を理解する柱である。

1. 道の国—古代の近江

近江国は都の場所にかかわらず、主要な街道が複数通過する地であった。五畿七道の体制の中では近江は畿内ではなく、東山道に属したが、畿内に準じる地域、特に東国・北国につながる特別な地位にあった。東(あづま)の国々が異質であるとされていた時代、近江は異境におもむく出発点であり、東国が開拓されていくとともに、近江は東西交通をになう役割を負っていた。近江を「道の国」と名付ける所以である。

2. 八幡・彦根・大津—様々な町の展開—

道の交差する所、道が多様な機能を集中させる所に町が生まれる。道に町が加わり単なる点と線から、面をもった地域の構造が生まれる。これが近江の国を豊かにし近江の国の形を作り出していく基礎になった。その過程を八幡・長浜・彦根・坂本・大津・膳所という町を通してみてみよう。

2-1 **八幡物語—近江の町の原型—**：八幡は、中世に近江の各地で形成された山城下の町、信長の安土等の伝統を受け継ぎながら、近世城下町の原型が作られ、それが近世の商業都市に受け継がれた。

2-2 **長浜から彦根へ—近世的城下町の成立—**：長浜は湖北において小谷城の遺産を受け継ぎ、秀吉によって新しい城下町として発達の基礎を築き、その後、豊かな商業都市として発展した。一方彦根は、当初佐和山に配置された井伊直政が、その旧領であった高崎の城下町建設の経験をいかして、新しい城下町彦根をつくった。その後近世を通じて彦根は近江を代表する城下町であり続けた。

2-3 **坂本・大津・膳所—湖南の町々—**：湖南では信長の時代に坂本城が築かれ、その資産は大津に受け継がれ、近世には港と街道を軸にした商業都市として発展した。城下町は膳所に城かれた。

3. 魚米の郷—近江の生業—

近江は豊かな農業生産の場であった。広々とした水田風景、丘陵地の畑、地場産業としてのモノづくり、これが近江農村の「原風景」である。これに加えて水の郷、漁の里という側面をもつ。

おわりに 滋賀県の成立—廢藩置県—

明治になって近江は範域としてはそのまま滋賀県となった。その過程で、南北の違いが基礎にあることが明らかであったが、県庁は近世の中心都市彦根ではなく大津に置かれた。

(7) 滋賀短期大学全学的プロジェクト

1) 第2回幼児教育アカデミーinSHIGATAN

幼児教育保育学科 久米 央也

1. はじめに

昨年度に引き続き、滋賀県下の保育所、幼稚園、こども園、市町教育委員会の関係者を対象に研究会「第2回幼児教育アカデミーinSHIGATAN」を開催した。平成30年度より改訂（定）された幼稚園教育要領や保育所指針等にどう対応して具現化していくかについて、今回は「一人一人が生き生きと輝く保育・幼児教育のあり方」をテーマに「一人一人が輝く特別支援教育」を中心に研究会を開催した。本学では、全学的な研究体制のもとに取組を始めており、その成果を踏まえ、滋賀短期大学が長年培ってきた研究の財産を県下に示し、少しでも滋賀県の幼児教育充実に向け貢献したいという願いを込めて開催をしている。2月の日曜開催という中、多くの先生方の参加があった。

2. 研究会概要

(1)日時 平成31年2月17日（日）13時～16時30分

(2)会場 滋賀短期大学

(3)研究テーマ「一人一人が生き生きと輝く保育・幼児教育のありかた」

(4)講座・講演内容



本研究会は3部構成で開催した。第1部は研修講座「一人一人が輝く保育実践講座」である。3つの講座から希望する講座を選択し参加してもらった。どの講座も、大変熱心に参加していただき、事後アンケートにおいても高い評価をしていただいた。

A講座「一人一人が輝く運動遊びの実際」小野清司園長(滋賀短期大学附属幼稚園)

B講座「一人一人の子どもが輝く学級経営」山中よし枝特任准教授(滋賀短期大学)

C講座「一人一人が輝く音楽あそびの実際」柚木たまみ教授(滋賀短期大学)

第2部は、本学の全学的プロジェクトの取組の発表である。平成29年度から全学的に取り組んでいる幼児教育における教材開発・教育プログラム開発の取組について発表を行った。

第3部は、大垣女子短期大学 松村 齋 教授による「一人一人の子どもの内面に寄り添う丁寧な支援のあり方」という演目での講演である。これから日本の幼児教育における特別支援教育についてわかりやすく解説していただいた。

3. 総括

滋賀短期大学として滋賀県幼児教育充実に向け少しでも貢献したいという思いで開催したが、多くの参加者に恵まれ概ね成功したといえる。今後も、滋賀県の保育・幼児教育充実に寄与していきたい。

(7) 滋賀短期大学全学的プロジェクト 2) 第3回幼児教育アカデミーinSHIGATAN

幼児教育保育学科 北尾 岳夫

1. はじめに

今年度も滋賀県・滋賀県教育委員会、ならびに大津市・大津市教育委員会の後援を受け、第3回の幼児教育アカデミーを開催した。これまで年明けの2月に開催であったが、今回は開催時期を11月に設定した。多くのイベントが開催される11月の連休ということで参加者数も危惧されたが、実りある事業であった。

2. 開催概要

1) 日 時 令和元年11月23日（土・祝）13:00～16:30

2) 会 場 本学3号館

3) テーマ 子どもの発達と体験について学びましょう

4) 内 容

<研修講座の部> 13:00～14:00

A 講座 「子どもの発達からみた運動と自己肯定感」

滋賀短期大学附属幼稚園 教諭 近藤鉄矢

B 講座 「自然・体験活動による子どもの成長～幼児キャンプ実践より」

滋賀短期大学 教授 北尾岳夫

C 講座 「幼児期における『暮らしの豊かさ』を考察する～『洗濯物をたたむ』ことから」

滋賀短期大学 地域連携研究センター 准教授 松村都子

<報告の部（ポスター発表）> 14:05～14:35

全学的プロジェクト「幼児教育における教材開発・教育プログラム開発の取組」(6タイトル)

滋賀短期大学教員 個人研究報告 (7タイトル)

一般募集「私たちの実践報告」(3タイトル)

<特別講演の部> 14:40～16:30

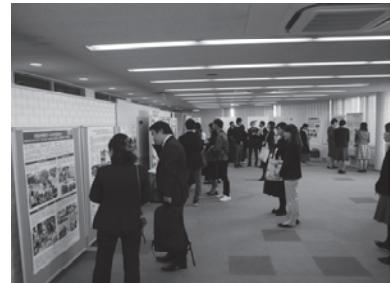
「子どもの発達と体験～暮らしの中の『必要なお世話』と『余計なお世話』」

東洋大学 ライフデザイン学部 生活支援学科 子ども支援学専攻 教授 嶋崎博嗣

3. まとめ

同日に大津市の保育者を対象としたイベントが開催されるなど、参加者募集には厳しい条件であったが、ポスター発表も含め一般的な参加者、本学学生、教員の参加もあり、コンパクトながらも実りある事業となった。全学的プロジェクトも最終年を迎え、評価委員の方からもよい評価を得ることができたプロジェクトであった。特別講演講師としてお出でいただいた嶋崎先生のご講演は、具体例をお示しいただきながら、実際の子どもの姿が想像できる非常に分かりやすい内容であった。

本事業開催に向けて協力いただいた皆様に、紙面をもって感謝の意を表したい。



ポスター発表の様子

(8) 乳幼児総合研究所

1) 乳幼児総合研究所の今後の願い

乳幼児総合研究所 前川 賴子・浜崎 由紀・松井 典子・松井 瑞季

1. はじめに

平成 14 年、本学に乳幼児総合研究所が創設され 17 年が経った。地域子育て支援事業として位置づけられ、子育て相談事業の 1 つとしても機能している。また、大学ならではの子育て支援事業「すみれがーでん」は、幼稚教育保育学科の学生の保育実践が出来る学びの場となっている。学生が模擬保育を行う時は、計画・準備・実行し評価・反省して次に繋げられるように専門の担当者による指導も受けることができる。また、年間を通して 7 回行われた専門演習の授業では、教員が自分の専門分野を活かした様々なプログラムを学生と共にを行い、学生の力量を高める良い場面でもあった。

2. 活動内容

【すみれがーでん】

今年度は、保育士が季節ならではの遊びを年間 22 回提案し、親子と一緒に遊びに取り組んだ。内 12 回は 2 回生の専門演習の授業として行った。すみれがーでんは、本活動を希望する学生が中心となり、授業で学んだことを活動に活かせるように保育士と連携し、遊びの計画、指導案作成、模擬保育に取り組んでいる。今年度の学生の参加は、約 80 名であった。また、1 回生はゼミごとに全員活動を見学し、子どもや保護者の姿、2 回生や保育士のかかわりを観察し、記録を書く経験をしている。書いた記録を提出し、実習に向けて記録の取り方の指導を一人ずつ行った。夏には、生活学科と共同で親子クッキングをするなど、他学科との連携も行っている。



【ぱっぱがーでん】

親子が自由に遊ぶ活動である。今年度は、年間 66 回実施した。参加人数に合わせて、体操や、絵本の読み聞かせ、簡単なあそびを提案することで、昨年度より参加人数が増えた。また、学生にも親子とのかかわりをもち、参加できるようにすることで、ぱっぱがーでんにも自主的に参加する学生が増えた。したがって、本活動は、保育体験や保護者対応を経験できる貴重な場となつた。



【子育て相談】

すみれがーでん、ぽっぽがーでんを利用される保護者を対象に、日々の悩みや、子どもの発達、成長について、育児不安などの相談を受けた。特に一人っ子の保護者や、きょうだい共に未就園児の保護者は、大人と話をしたい気持ちも強く、よく利用している。また、きょうだいが園に通っている保護者の中には、園では言えないが誰かに聞いてほしいという思いをもって来られる方も多く、子育て支援の大事な役割を担っている。



【学生の憩いの場】

今年度は、授業がない時間にプレイルームに足を運ぶ学生が多く、落ち着いた空間で授業の課題、ピアノの練習、テスト勉強などに取り組んでいた。学生が自ら進んで、プレイルームの壁面飾りを作成したり、クリスマスツリーを飾ったり、環境設定の手伝いを積極的に行なうことも多く、保育とは違うが、保育者として必要な体験、現場に出た時にすぐに活かせる体験となった。

また、現場での話や、実習での話を尋ねに来る学生も多かった。保育士の経験から注意すべきことや、保育者としての心構え、現場で起きていることなど、就職や実習の為のアドバイスをすることができた。



3.まとめ

乳幼児総合研究所は、地域の子育て家庭の子育て支援と共に学生への教育活動、幼児教育保育学科教員による専門性に基づいた研究活動を行っている。今年度の本研究所の取り組みは、特にぽっぽがーでんの活動を充実させ、参加される人数に合わせて遊びや活動内容を提案した。加えて、学生も主体的にプレイルームの環境を整えたり、子どもたちと積極的に遊ぶ姿が見られた。これらは、保育職を目指す学生たちの生きた学びの場になっている。来年度も引き続き、子育て家庭の憩いの場、学生にとっての学びの場となる活動を継続していきたい。

6. 高大連携事業

(1) 滋賀県教育委員会の連続講座（2019年8月）

- 1) 2019年8月21日 10:40～12:10 滋賀短期大学
食を通して世界を学ぶ 南米 中平真由巳（滋賀短期大学教授）
- 2) 2019年8月21日 10:00～12:00 滋賀短期大学
心理学に興味がある人、集合！～心理学を活かす仕事と資格～
荻田純久（滋賀短期大学教授）
- 3) 2019年8月20日 13:00～14:30 滋賀短期大学
日本の医療の値段～風邪から高度医療まで～ 沖山圭子（滋賀短期大学教授）

(2) 滋賀県等の高等学校への出前授業（2019年1月～2019年12月）

- 1) 2019年1月30日 北大津高校
赤ちゃんに必要な保育者のかかわり 浜崎由紀（滋賀短期大学講師）
- 2) 2019年2月21日 丹南高校
栄養と食について考え方 灰藤友理子（滋賀短期大学助教）
- 3) 2019年3月13日 湖南農業高校
子どものための造形～紙から広がる世界～ 深尾秀一（滋賀短期大学教授）
- 4) 2019年3月19日 湖南農業高校
子どもと音楽・音あそび 柚木たまみ（滋賀短期大学教授）
- 5) 2019年3月20日 長浜北星高等
保育幼児教育の魅力と可能性 北後佐知子（滋賀短期大学講師）
- 6) 2019年7月11日 石部高校
観光産業とホテルについて 中村吉弘（滋賀短期大学特任教授）
- 7) 2019年7月11日 野洲高校
保育の中の人形遊び 浜崎由紀（滋賀短期大学講師）
- 8) 2019年9月25日 石部高校
絵本の読み語りをしてみよう 浜崎由紀（滋賀短期大学講師）
- 9) 2019年9月26日 高島高校
糖尿病について学ぼう 山岡ひとみ（滋賀短期大学講師）
- 10) 2019年10月23日 大津清陵高校
絵本の読み聞かせについて 浜崎由紀（滋賀短期大学講師）
- 11) 2019年12月6日 栗東高校
身近なものを使って遊ぼう 深尾秀一（滋賀短期大学教授）

-
-
- 12) 2019年12月16日 大津商業高校
食を通して世界を学ぶ 中平真由巳（生活学科教授）
 - 13) 2019年12月16日 大津商業高校
身近な素材を使ってあそぼう 前川頼子（滋賀短期大学教授）
 - 14) 2019年12月18日 守山北高校
子どもの成長・発達と音楽 柚木たまみ（滋賀短期大学教授）

2019年4月3日（水） 中日新聞

入学式に参加した新入生たち＝
大津市竜が丘の滋賀短期大で



学業にまい進 誓って第一步

滋賀短大で入学式

大津市竜が丘の滋賀短期大で二日、入学式が開かれた。外国人留学生十五人を含む新入生三百六十六人が、充実した学生生活に向けて、第一歩を踏み出した。

式典では、秋山元秀学長が「地域の課題を発見し、自分の専門分野から何ができるかを考えてほしい」と呼び掛けた。新入生代表として、幼稚教育保育学科の吉田亞利紗さん（二）があいさつし、学業にまい進することを誓っていた。

（柳昂介）



ノートテーカーの養成講座を受ける滋賀短大の学生ら
一大津市竜が丘の滋賀短大で

誰もが学べる環境へ

聴覚障害の学生支援 要約筆記講座

滋賀短大

大津
聴覚に障
害のある学
生に代わり、講義の内
容などを隣で要約筆記

する「ノートテーカー」
の養成講座が、滋賀短
大(大津市竜が丘)で今
年、聴覚に障害のある
女子学生1人が入学し
たことをきっかけに、
今回初めて講座を開
催。誰もが学びやすい
環境づくりを目指す試
みが、湖国のまなびや
でも始まった。

「聞こえない学生に
とって授業は、皆さん
にとって手話ですっ
と話されているような
ものです」。16日夕、
同短大の教室の一室。
障害のある学生を支
援するNPO法人「ゆ

に」(京都市)の塙崎 泰紀さん(31)が、集ま
った学生や市民ら10人
に語りかけた。実際の
場面を想定したノー
トテーカーのシミュレー
ションなどもあり、参
加者は心構えや「早く、
早く」と叫びながら、
冒険コース開放中※要電話予約



国指定史蹟天然記念物
龍河洞
りゅうがどう
財団法人 龍河洞保存会
高知県香美市土佐山田町
☎ 0887-53-2144
冒険コース開放中※要電話予約

正しく、読みやすく
書くコツなどを学ん
だ。

ノートテーカーは一
般的に、1科目につき
2人が必要とされる。
大学生の場合、1人あ
たり10人のノートテー
カーが必要とみられる

【菅健吾】

が、短大の場合は1日
当たりの授業が大学よ
りも詰まっているた
め、より多くの人数が
必要とされるという。

講座を受けた、ビジ
ネスコミュニケーション学科2年の古市温(あき)
さん(19)は「障害を持
つ人と一緒に生活して
いるよう、ノートテー
カーを取り組みたい」と
意気込みを語った。

講座の冒頭には、女子
学生も「今日は講座に
来てくれてありがとうございます。今後もよ
ろしくお願ひします」と
手話で感謝の言葉を
述べた。

塙崎さんは「聴覚障
害に悩みのない参加
者が多かったが、実際
に触れ合えば、分かることもたくさんある。
まずは仲良くなることから、支援の輪を広げ
てほしい」と話す。

滋賀短大での講座は
全2回の予定で、次回
は30日に開催する。

52

2019年9月1日（日）

広報おおつ No.1370

⑤滋賀短期大学連携講座

時9月21日(土)14時～15時30分

内「ロマンス語」とは何か？～西ヨー

ロッパの言語をめぐる旅～

申電話で同館へ

定①先着30人②先着60人(当日13時30

分から玄関ホールで入場整理券を配布)

③先着20組④先着60人⑤先着35人

￥いざれも無料

2019年10月1日（火）

広報おおつ No.1372

◆滋賀短期大学 公開講座 ▷「私たちは太
陽という星に生かされている～お日さまとと
もに元気にくらす～」=10月12日(土)14時
～▷「クラシック音楽の愉しみ(パート2)～
木管五重奏の響き～」=同26日(土)14時30
分～。いざれも滋賀短期大学で。入場無料。同
大学地域連携教育研究センター☎524-3605

2019年10月1日（火）

広報おおつ No.1372

滋賀短期大学連携講座

時10月26日(土)14時～15時30分

内「教養としてのベトナム」

定先着30人

申直接または電話で同館へ

￥いざれも無料



SHIGETAN
中村義典
滋賀県立大学
准教授
専門: デジタルマーケティング
URL: www.sfc.ac.jp/~shigetan/

中村義典准教授は、デジタルマーケティングの専門家として、多くの実績を有する。特に、ECサイト構築支援や、デジタルマーケティング戦略の立案において、多くの企業に貢献している。また、毎年多くの研究論文を発表し、国際的な評価を得ている。



中村吉弘
中村吉弘
専門: デジタルマーケティング
実務経験をもとにした授業を提供し、
また、実践的な実践者を育てたい。

中村吉弘准教授は、実務経験をもとにした授業を提供する専門家です。実践的な実践者を育てるため、多くの実習やプロジェクトを通じて、学生たちに実際の現場で学ぶ機会を提供しています。



中村智子
中村智子
専門: デジタルマーケティング
実務経験をもとにした授業を提供し、
また、実践的な実践者を育てたい。

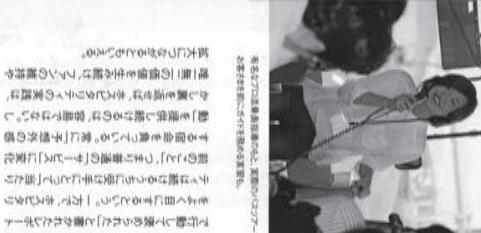
中村智子准教授は、実務経験をもとにした授業を提供する専門家です。実践的な実践者を育てるため、多くの実習やプロジェクトを通じて、学生たちに実際の現場で学ぶ機会を提供しています。

来訪者をもてなす。

滋賀の研究
想定以上の感動で
主導的行動が生じるアプローチの高齢

「相手が喜ぶことを察して行動すること」
セミナーフォーマットの違い

セミナー	↓	喜ばれたことがない
セミナーフォーマット	↓	喜ばれる



中村智子准教授は、実務経験をもとにした授業を提供する専門家です。実践的な実践者を育てるため、多くの実習やプロジェクトを通じて、学生たちに実際の現場で学ぶ機会を提供しています。



中村智子准教授は、実務経験をもとにした授業を提供する専門家です。実践的な実践者を育てるため、多くの実習やプロジェクトを通じて、学生たちに実際の現場で学ぶ機会を提供しています。

地域連携年報 第七号

令和 2 年 2 月 29 日

滋賀短期大学 地域連携教育研究センター

〒520-0803 大津市竜が丘 24-4

TEL 077-524-3605 FAX 077-523-5124

SUMIRE